

虹色タイム

作 池田 真哉

旅の記憶は人を生き返らせる。

ローマ、フィレンツェ、九州、東北旅行の思い出がよみがえる。

主人公・純一は、ゆっくりと歩みはじめる。

今と昔が交錯するトラベルストーリー

目次

1. はじまり 大切なものを失う
2. 九州の山々で得たものが舞い戻る
3. 鉄道敷の楽園は今もある
4. ローマ・フィレンツェが再び溢れる
5. 東北の星々の輝きは瞬く
6. 紅葉狩りへ行って見たものは？

1. はじまり 大切なものを失う

「わたしはね。かわいいものが好きなのお」

姪の優実が、純一の手を引っ張り、キッズ向けの小物売り場へ連れて行こうとしている。優実
は6歳で小学1年生だが、同年代の子供たちと比べて、とびぬけて背が高い。

「だめだって、本屋さんへ行こう。面白い本があるかもよ」

純一は強引に逆に腕を引っ張り、前へ進もうとすると、優実はてこでも動かないという素振り
をする。

ようやくあきらめて、本屋さんに行けば、面白げな児童誌を見つけて、買って買って攻撃を仕
掛けてくる。純一の父の高明は優実の勢いに負けて雑誌を買うことになった。優実
は歩きながら、雑誌を読んで楽しそうに笑っている。ようやく静かになったと思
い純一と高明は顔を見合わせていた。

クリスマスのプレゼントを買いに行きたいから、優実を預かってくれと妹夫婦に頼まれ、純
一は、休日に父と優実とで近所の大型ショッピングモールで買い物をすることになった。優実
は、優しいおじいちゃんとおじちゃんに甘えられるチャンスを得たのだ。

大型ショッピングモール内では、小学生を対象としたフォトグランプリを開催しており、所定
の位置で写真撮影をして、それをメールで送り、入賞するとプロのカメラマンによる撮影の機会
を得られる。

「優実は、将来、アイドルになりたいんだよな」

「うーん。違う。違うの」

「スーパーモデルだっけ？」

「違うの。ウェイトレス」

「そうか。ウェイトレスなんていう娘はなかなかおらへん。これはなかなか見込みがある！ 応
募しよう。それから好きな食べ物は何？」

「ぶどうと、さくらんぼと、それと・・・マシュマロ！」

「そうか、マシュマロにしよう」

さっそく、純一は所定の場所へ行って、携帯で優実の写真を撮り、プロフィールを記載してフ
ォトグランプリに応募した。色々な機会を与えてやらんと。純一は行動が人の自信となり、血肉
となることをよく分かっていた。それと能力は出し惜しみをしてはならないことも。

純一は2年前に交通事故で妻の愛莉を失った。純一が35歳の時であった。失った悲しみは、今
でも胸に突き刺さっている。怒りや後悔、無力感にさいなみ、やり場のない気持ちと毎日付き合
わなければならない。今日は渋滞しているから、ショッピングモールまでは裏道で行ったほうが
いいと薦めたところ、その途中の交差点で、黄色信号で飛び込んできた車に側面から衝突され、
そのまま帰らぬ人となってしまった。

37才の純一は35才の純一を責めている。純一が普段は通らないルートを勧めたばかりに、
事故にあって死んでしまった。今まで何千回となくキスしてきた妻がいなくなってしまった。い

っそのこと、妻との10年間の記憶がどこかへ行ってしまえばよいと思うこともあるが、妻との出会い、結婚生活が純一のすべてであり、その記憶が消えるということは、純一も消えるということに等しかった。

確かに、妻と一緒に自分も死んだ。そのように思った。死んだと思っても、物理的には生きている。生きているといっても大傷を負って苦しみながら生かされている。なぜ、生きられているのかよく分からないが、息を吸って、平然と働き、酒によいながら、痛みを誤魔化しつつ、次の将来を探っている。どうして生きてらよいか分からない。今は両親と共に住んでおり、近くに妹夫婦も住んでいる。温かな環境だ。純一は、もう誰も失いたくはなかった。父も母も、妹も義弟も姪も誰も彼も。

姪の優実は明るく快活であり、甘えたがりである。この子のために力になってやりたい。そう思うだけでも、生きる力が湧いてくる。まだ幼いこの子は、どのように成長していくのか楽しみだ。助けが必要なときには、手を貸して、少しでも楽になるように手助けをしてやろう。厳しさも必要であるが、手を差し伸べることもまた必要なことである。

この温かな環境で楽しい時間を過ごし、よい時を重ねていく。それがすべてだと思う。純一は、もう前の自分と同じではないと思っていた。妻の死が胸元に突き刺さっている。以前と同じものを見ても、同じように考えることができない。

妻の死という衝撃は純一の脳神経に確実な変化を与えた。見るものすべてが涙に滲む。おかしい回路が出来上がってしまったようだ。目の前の風景が遠くなっていく。日常の景色が遠くなる。自分と切り離されていく。思い出の一部のような懐かしさを帯びた景色として写る。自分はここにいるのか。いないのか。いやいや、まだここで、仕事をしている。

人間は新陳代謝を繰り返し、7年程ですべて細胞が入れ替わるという説がある。この説に従えば、物質的に考えれば7年で別物になっていると言える。ただ、別物でないと思わせているものがあるとすると、それは記憶に違いない。記憶があるから自己同一性を保ち、今の自分が過去の自分と同じだと思えるのだ。忘れてたり消えたりする記憶を頼りに、自分というものが成り立っている。

記憶がなくなれば、過去と切り離され自由になる。そういうことはありえない。この先、どうやって妻との記憶と付き合っていけばよいか分からない。純一は自分の過去を整理してみようと思うが、亡くなった妻との10年間については、今は触れたくはなかった。思考が避けるかのように、その前の記憶へと向かう。

妻の死から1年間掛けて家の中の片付け、遺品整理をして、家を売り出し、半年間かけて、このほど無事に売却が完了した。売却のために、住んでいた家の中を整理しているときに、大学時代に書いた日記帳が見つかった。文字がいっぱい詰まっている。

今は実家の本立てに置いてある。大学時代のサイクリング同好会で行った九州合宿の旅行記であった。1995年3月5日、初めて飛行機に乗ったときのことであった。1995年は阪神淡路大震災が発生した年で、1月17日大地震発生後、純一らは救援ボランティアにも行かず、九州で自転車ツーリングをしていたのである。神戸で交通は寸断され、新幹線、鉄道、道路は使えず東京から九州方面へ行くには飛行機しか方法はなかった。純一が21歳のときのことだから、も

う16年も前のことである。純一は過去の日記帳を開いた。妻の記憶がないときの純一がそこにはいた。

2. 九州の山々で得たものが舞い戻る

1995年3月5日 初フライト

初めてのフライトに胸が高鳴っていた。搭乗時間の2時間前に来て、フロントのロビーで待っていた。いつもの自転車旅行と同じように輪行バックを肩から下げながら、空港まで大きな荷物をもって運ぶ。空港に入り、搭乗手続きを済ませ、その大きな荷物を搭乗カウンターに預ける。身軽になり、ゲートを通り、大澤と二人で、搭乗するまでの間、待合室で座っていた。大澤はその間、携帯電話からJリーグのチケットを予約しようと予約受付先まで何度も連絡をしていたが、繋がらなかった。出発の時間になったので、立ち上がると、一人挟んで右隣に、長身の西尾が悠然と何気なく座っている。すぐそばにいたことをお互い気づかずに、同じ空間にいたのである。いつ来たんだ？ と相互に同じ質問を繰り返し、話しながら搭乗ゲートから飛行機へと乗り込んだ。

座席は、窓側が西尾、真ん中が僕で、通路側が大澤だ。大澤は高校時代の修学旅行で飛行機に乗ったことがあったが、西尾と僕は今回が初めてで多少興奮気味であった。正確に言えば、西尾は幼い頃、乗ったことがあるはずなのだが、そのような記憶はふっとんでしまっているから、今回が初めてだといってよいと言っていた。飛行機はゆっくりと滑走路へと進む。離陸態勢が整う。ジェットエンジンの爆音とともに、急激に加速され、窓の外の景色も急速に流れていく。自分では制御できない大きな力に振り回されている気がして、もう笑うしかなかった。飛行機はそのうち傾きはじめ、窓の外の景色も、とんでもなく斜めになっている。そのまま、右旋回をしながら上昇してゆき、左の窓は空の水色だけになり、左旋回したときは下の陸地がよく見えた。

しばらくして千葉南部の山並みが見え、その背後に九十九里浜が見えた。千葉県を一望して、その下で生活している人々、もしくは自分たちを思い浮かべる。飛行機は雲の上へ飛び出て、水平飛行へ入った。叢雲が水平ずっと彼方まで拡がり、第二の大陸の存在を信じてしまいそうな気分になる。雲のないところの真下には、青い海が広がっていた。四国の山並みはまるで洗濯板のようでもあるし、鋸の歯のようでもあった。鹿児島に入るとシラス台地が見える。大地の端部が急斜面に切れ込んでおり、崖の表面は白く崩れやすさを露呈している。天候は良好で、快適で安全なフライトを楽しめ、あっという間に鹿児島に着いた。あまりの早さに、西尾は実はここは静岡じゃないかと疑っていた。

純一は21才であった。

高速バスを使用し西鹿児島まで行く。吉波が迎えに来てくれるはずであったが、風邪をひいたとのことで、代わりに吉波のお兄さんが出迎えてくれた。吉波のお兄さんは頬骨が出て堀が深く野性的な顔立ちであった。そして親切な人で、鹿児島市内の名所を自転車で回って案内してくれた。西郷像、大久保像、斉彬を祭る神宮、桜島のよく見えるポイント、石造りの橋を見ることができた。吉波の家は催馬楽にあり、ちょうど崖地の中腹にある。自転車でゆくには恐ろしい程の坂を登らねばならない。僕はウエストポーチをつけていたため腹がしばられ、脳に血液が上らな

くなり、吉波家に着いたところで、くらっときて、気分が悪くなり顔面蒼白になっていた。吉波と彼のお母さんへの挨拶もままならないまま、ただちにトイレを貸り、大便をして少し落ち着いたが、まだ血の気が薄いと感じられた。

一人だけ顔面蒼白で吉波のお母さんに変に思われはしないかと心配しつつ準備して頂いた夕食を食べたが、美味しかったせいか食は進み、次第に気分もよくなってきた。はじめに、きびなごの刺身が出てきて、次に豚骨、サツマイモ天ぷら。サツマイモの中身は、白ではなく紫色をしていた。鹿児島では、さつまいものことを唐芋（からいも）と言う。また、かつおのたたきも新鮮で美味しかった。鹿児島の郷土料理を堪能した。最高の食卓であった。

純一は37才である。記憶は残念なものだ。吉波が風邪のため彼のお兄さんが迎えてきてくれたことや、西郷像、大久保像、斉彬を祭る神宮を見たこと、吉波のお母さんが振舞ってくれた鹿児島の郷土料理のことなど、すっかり忘れてしまっていた。花粉が舞う中、指宿へ行って砂風呂に入ったこと、スギ花粉の飛散量が尋常ではなかったため、花粉症が極度にひどくなり、涙と鼻水を流しながら霧島の林道を自転車で走ったこと、九重連山を駆け抜け、高千穂溪谷でボートを漕いだこと、阿蘇山の火山ガスを吸って苦しかったこと等印象の強いものは覚えている。しかし、それ以外の記憶はおぼろげで、写真等を頼りに、あんなこともあったなと思い出せるくらいである。16年も前のことになるとそうなるのかもしれない。残念だが、自転車ツーリング九州合宿という印象に残るイベントであったとしても、細部は覚えていない。

多くの出来事が積み重なる中、16年前もの瑣末な出来事は、日々の記憶の中から消えていく。大学を卒業し、会社へ入り社会人となり、車を買って、結婚をして、社宅に入り、マンションを買い、妻と死別し、まだまだ働いている。16年という歳月が記憶を風化させ、楽しかったことや、爽快なこと、美しいと感じたもの、漠然とした印象や雰囲気は心に積み重なり残るが、瑣末なことは霧散してしまう。記憶力のよい人が昔話を話すことで過去の記憶を思い出すこともある。文字として記録に取り、振り返って読んだ時も同様、頭の中の引き出しから記憶として出てくる。思い出すきっかけがなければ、過去そのものがなかったかのようにそのまま闇の中に葬り去られる。多くの事柄が日々、なきものにされている。

3月6日 指宿の天然蒸し風呂砂温泉

吉波のお母さんに、朝7時半に起きると言っておきながら、僕らが起きたのは9時であった。その後、出発前の身支度をしはじめたが、結局ツーリングの出発は11時過ぎになってしまった。初日のランというものはつらいもので、今回も例外ではなかった。僕らはとばしすぎた。三人でローテーションを組み、先頭を順番に変えていったが、先頭というものは変なプライドが働き、自分が遅いと思われないようにペダルを漕ぎすぎる。2番手以降は必至に付いて行こうと、背後にぴたり付く。もちろん風の抵抗を防ぐということもあるが、それが先頭の者にとって、プレッシャーとなり何か追い立てられているかのように感じるのである。

そのような状況であるので、ローテーションを繰り返していくうちに、どんどん速度が早まり、全員が疲れてしまう。風は大して吹いてはいなかったが、僕らの激走による向かい風すさまじ

い中、海岸線を快走していった。けれども、ルーズな朝寝坊のおかげで、池田湖も開聞岳も行く時間がなくなり、目的地を指宿とすることにした。途中にある知林ヶ島と陸を繋ぐ全長800mの砂州である砂の架け橋を見る時間もなかった。

海岸線はいかにも南国らしいところで、絶好の写真ポイントが続く。そうした海岸線の先に指宿温泉がある。指宿温泉は、全国でここひとつしかない天然蒸し風呂砂温泉である。過去には別府にもあったということであるが、現在は指宿だけに限られている。指宿温泉に着くと、三人の背の低いおばあちゃんグループがちょうど風呂から出てきたところで、僕らが砂風呂温泉を探しているのを見ると「ここは有名だから入っておきなさい。ここ、ここ、入って絶対損はせんけん。いい経験になる」と言ってしきりに薦めてくれる。僕らもそのつもりで、自転車を停める場所を探していると、僕らが渋っているのかと思ったのだろう。「すぐ、そこ、ここ、入ってすぐそこ、絶対いいけん。入ってみなさい」と、また三人でがちゃがちゃと薦めてくれたので、とりあえず中へ入り、敷地の奥へ自転車を進め停めた。

さて、砂風呂温泉であるが、そこで働くおばちゃんに砂場に穴を掘ってもらい、その中へ入り、上から砂をかけてもらう。砂をかけてもらう時には、なんともくすぐったいもので気恥ずかしい気分になるが、完全にかけてもらうと、砂の重みはずどんと胸に落ちる。身体全体が圧迫を受ける。

しばらくすると全身が蒸され、だんだんと息苦しくなる。熱気むんむんの中、時間がたてばたつほど圧迫感が強まり、呼吸も苦しくなる。西尾と大澤は15分位で砂風呂を出たが、僕は20分まで辛抱した。おばちゃんに「お兄ちゃん、大丈夫か。ずいぶん頑張ったな」と言われて、もう限界だと思いやめることにした。砂の中から出ると、浴衣が汗でびしょびしょに濡れていた。涼しい風が通り過ぎる。心地いい。なかなかできない体験だ。

砂風呂で働くおばあちゃんの雑談を聞いていたら、方言がきつく言葉が、皆目分からない。分かったのといえ、ば、「15日」という言葉だけであった。きっと、15日に何かあるのであろう。風呂で砂を洗い落とし、ロビーでほとぼりを冷ましてから、砂風呂温泉を出た。

指宿駅へ向かうと、駅前に散髪1,000円の看板がかかった床屋があり、試したくなるが、時間がなかったのでやめにした。いつも常備しているはずの市販の輪行バックを忘れてしまったため、あり合わせのレジャーシートで分解した自転車を包みゴムひもでしばって、電車の中へ持ち込んだ。へんてこりんな輪行バックとなったため運びにくい。ちなみにレジャーシートを買った店は、丸十百貨店と看板に掲げた地元のひなびたスーパーであった。百貨店とは、昔の意気込みを感じられる。電車に乗り込み19時ごろ西鹿児島駅の駅に到着した。

その夜、行き違いもあったが、あとから合流組のジョンと妙なところでばったり会い、そのまま吉波の家へ一緒に向かい、昨日に引き続き泊らせてもらった。その晩の夕食も、またボリュームがあり、昨日の豚骨、さつまいもの天ぷら、種子島特産はませりの天ぷら、果物のパッション等をご馳走になり、腹いっぱいになった。

3月7日 ラムネ温泉とジョンのクラッシュ

病み上がりの吉波も加え、五人で霧島神宮へ向けて出発した。鹿児島湾に沿って北上し桜島を

あとにした。朝の目映いばかりの光が映える海を横目に海岸線を疾走し、遠くなる桜島は霞んで見えた。

国道10号を走り小浜海水浴場を横目にしばらく行き、街中に入ったところの交差点を左折すると国道223号にと入る。北上すると次第に山道になり、森へ入り、なんだか気分がおかしくなってくる。花粉だ。真っ赤になって咲き誇り、花粉を撒き散らす杉林の中へと何も知らされずに、おずおずと入り込んでしまったのだ。杉林を確認するよりも早く、僕の花粉感知器が反応した。こうも的確に鼻が反応するとは思いもしなかった。鼻水がずるずると滝のように流れる。真っ赤になった植林された杉林の整然とした景色を眺めるだけでも、気がおかしくなりそうであった。走行中は、多量の空気を吸って吐くことによって粘膜が麻痺されるのか分からぬが、くしゃみはあまり出なくなる。けれども、自転車を止めると、もうだめだ。だから、あまり停まりたくはなかった。

期待していたラムネ温泉はすでに廃墟と化しており、ラムネ味の湯に浸かることもできなかったし、ラムネ味の湯を飲むこともできなかった。もっともラムネ味がどうかは分からないが、名称がラムネというぐらいなのでラムネ味がしてもおかしくないだろう。もしかしたら、ラムネ味ではないにもかかわらず、ラムネ温泉という名称としたがため、客を裏切ることになり、結果として潰れることになってしまったのか？ まあ、そんなことは、想像してもしょうがない。考えるのはやめておこう。さらに山道を登ってゆき、塩湯温泉あたりを右に曲がると下り坂になる。

下ってゆくとその途中にレジャー施設が忽然と現れ、僕らの遊び心をくすぐった。最近完成されたのだと思うのだが、地図にも載っておらず名前も分からない。グラススキー、スライダー、パターゴルフができる。スライダーを1回だけ滑ろうということで試すと、面白かったので2回も滑った。ジョンは2回目の時にクラッシュした。僕は調子よく、かなりのスリルを味わいながらコーナーを曲がると、ジョンが直線コースでボードをもってふらついている姿を発見した。言うまでもなくジョンは路線から外れクラッシュしていたのだ。転倒したときの摩擦でゴアテックスに穴が開いていた。カーブを抜けてジョンを見かけたときには、なぜ、こんなコース半ばでふらついているのか分からなかったが、あとから訊いて転倒したということを知り解した。

そのレジャー施設からは、霧島の新燃岳や桜島がよく見え、眼前に大パノラマの広がる素晴らしい景観の臨める場所であった。ガスっている彼方の山々、シラスっている崖、壮観な眺めであった。そして、そこからさらに下り、霧島大橋の手前にある民宿に泊まった。民宿の料理はコースを間違えてはいないかと疑うほど豪華なものであった。

3月8日 しゃもじとおわんと西尾のプーリー

今日は120kmの道のりを激走する日であったので、早起きして、気を引きしめて出発した。出発してすぐに霧島スカイラインへ向かう道が分からなくなり、とんでもない山道を登ろうとしていたが、念のため人に訊いてみようということになり、ジョンが民家に立ち寄って道を確認したところ、正しい道を教えてもらうことができた。全く違う道に向かおうとしていたのだ。朝から大変なことになるところであった。

山道は新燃岳を登るかなりの急勾配。緑豊かな林道の繊細な木漏れ日の斑模様の中を駆け抜け

て行く途中には、ところどころイオウの匂いが立ち込めていた。まさに僕らは火山性ガスの蒸気がシューシューと噴出している火山活動地帯を通過している。野生動物が力強く生きている。鹿が、荒々しい後ろ足の筋肉を見せつけながら道路を横断していく。僕らは突然現れた生き物に驚きと感動の声を上げる。しばらく行くと、湧き水の出る地点へと到達した。その地点には2台の自動車が止めてあり、中年のおじさん二人が水汲みをしていた。

中年のおじさんとは、37才の純一くらいの人のことを言っているのか？ 37才は中年というには早すぎるだろう。21才の若者が37才を見たら中年と見間違えるかもしれない。そうかもしれないが、37才と言っても21才となんら変わらない。変わるとしたら脳のしわに刻み込まれた記憶だけであろう。まだまだこれからだ。純一は日記帳を読みすすめたが、少し引っかかった。

一人のおじさんは白いポリタンクいっぱいに入れて持ち帰った。また別のおじさんは、有名な喫茶店のコーヒーに使う水は、みな、ここで汲んだものだと教えてくれた。何の混じりけもない自然の水を使ってコーヒーを飲むと美味しいらしい。僕もどんなものかと期待して水を飲むと、後味爽やかで、ひんやり冷たく嫌味もなく、体に染み込んでいくようであった。

こうして山道を順調に登り、霧島スカイラインへ入ると、周辺の樹海を一望できる素晴らしく眺めがよい場所であった。進んでいくと韓国岳が見えてくる。圧倒的なえびの高原の景観に胸の底から興奮を覚える。

犀の河原では所々に蒸気が絶頂に達しているかのような勢いで吹き出し、イオウの刺激臭が立ち込めている。地殻エネルギーの表出したその広々とした高原で昼食をとり、あとは一気に下りである。

ずっと下りなので、あっという間に10kmを走る。途中5km下った地点からは、あまりの気分のよさに放心状態となり何も覚えていない。快調に爽快に山を下る。小林まで下り、そこでひと休憩して、次は陰陽石を目指して山へと入り込んで行った。

到着すると、巨大な男性の性器と巨大な女性の裂け目の形をした巨石が奉られていた。そのエリアー帯は、男と女の性器の石像や木の彫刻が数多く奉納されており、お地蔵様は、右手にしゃもじ、左手におわんを持っている。しゃもじは男性の性器、おわんは、女性の性器を象徴するものと案内看板には記されていた。また、資料館があり、当然、中へ立ち入った。中には春画が展示されており、男女の糸乱れぬ姿が描かれていた。そこには男性の性器が妙に大きく詳細に誇張されて描かれており、壮大な作品が数多く展示されていた。絵物語に出てくる話の展開や男女の交わりの体位等、今も昔も変わらないものだなと西尾が呟き、みなも相槌を打った。まったくおかしな性器崇拜の宗教だと思うが、この宗教が全国に広まるなら世の中、平和になること間違いないだろう。西尾は直径50cm、長さ2mの木彫りの巨根にまたがり、喘ぐような表情を浮かべている。僕らは大フィーバーの内に陰陽石をあとにした。

そして、次に向かったのは綾の大橋（綾の照葉大吊橋）であった。本庄川に沿う道は、ずっと下りだという甘い憶測は打ち破られ、アップダウンを繰り返すきつい山道であった。もう、陽が暮れかかり、僕らはペダルの回転を早めて、そのアップダウンをこなしていったが、綾の大橋に

着いたのは16時40分。吊り橋は17時になると閉鎖されてしまう。僕らは綾の大橋をぎりぎり渡ることができた。橋の高さは尋常ではなく、足はすくみ、そのまま吸い込まれて転落するのではないかと思われた。高さに身をぶるぶる震わせながら、五人は綾の大橋を往復した。なぜ、高いところへ行くと人間は身がすくむのか。なぜ転落するイメージを思い浮かべてしまうのであろうか。墜落の気の遠くなる死の恐怖によるものであろうか。転落を想像しなくても、身の危険を体を感じ無条件に反応する。吊橋はスリルがある。

結婚して間もないだろう二人の男女が僕らの前を歩いていた。きっと新婚さんであろう。その吊橋の門は、僕らを最後にして閉じられた。橋の管理人は、僕らが渡りきるのを心待ちにしており、門を早く閉めたがっていた。橋の門を出るや否や、閉めてさっさと帰って行ってしまった。

まだまだ先は長い。慎重に山道を下り、時に登り、両脇にそり立っていた山の崖も低くなってくると、綾町の市街地へと入っていくことになる。ここまで色々なものを見てきたのだから、今日はとことんまで行けるところまで行ってやろうということになり、綾町の花の時計を見ることになった。それは日本一大きな時計とあった。しかし、期待していたものとは違い、花時計は牧場の中にあり馬糞の匂いが漂い、花といっても時計の盤面の中に花が植えてあるといった程度のものであった。あたり一面花畑の中に大きな花時計があると考えていた僕らの想像とは月と太陽の距離ほど離れていた。でも、日本一のものを見たということで納得することにした。

夕方は18時を過ぎ、空はオレンジ色に焼け、藍色の夜が迫っている。山を下り抜け、ほっと一息つく。国富町付近のコンビニで休憩を取り、腹ごしらえをして、また出発する。

しばらくすると西尾のリレーラーの調子が悪くなり、調べてみるとプーリが破損していることが分った。プーリとは変速機の一部品で、チェーンがかかっている滑車のことをいう。これが破損すると変速できなくなる。走っている途中に、破損してプーリーが落ちた可能性があるので、ジョンと西尾は、走ってきた道を逆戻りして探しに行ったが、辺りは暗くなる一方で、見つかることもなかった。

宮崎に着いてから自転車屋で修理する他なく、西尾は、重いギアしか入らないまま宮崎まで走り続けた。

宮崎に到着すると、陽は落ち真っ暗であった。自転車屋を探すために、本屋に立ち寄り、自転車雑誌をめくり探した。雑誌に掲載されている自転車屋に携帯電話で連絡したが、ほとんどの店と繋がらなかった。繋がっても、西尾に必要なリレーラーを置いている店はなかった。電話で探しても埒が明かないため、ジョンが通りすがりの人に、近くに自転車屋があるかどうか訊いて回ったところ、近くにリンリンハウスという自転車屋があることが分かったので行ってみることにした。リンリンハウスのショウウィンドーには数台のマウンテンバイクが展示されており、店構えから判断すると専門的に自転車を取り扱い、各パーツを取り揃えてあるように見えた。

残念なことに店は閉まり、店内の照明も消えていた。店の2階に店の人が住んでいるかと思われたので、チャイムを鳴らして呼び出そうとしたが、一向に応答はなかった。行き場を失った僕らは店の前で、どうしたらよいものかとかやがやと騒いでいると、隣のおばちゃんが表に出てきた。僕らが困っているのを見て、隣のおばちゃんは大声で自転車屋の主人の名前を呼び在宅か

どうか確かめたが、返事はなかった。さらに隣のおばちゃんは電話までかけたが、それでも反応はなかった。

隣のおばちゃんは感じのよい方で、自転車屋の主人が帰って来るまで、うちで休憩して待っておきなさいと親切に勧めてくれ、僕らを家にあげてくれた。おばちゃんは指圧師のようであった。16畳ほどもある大きな部屋で、指圧室と書かれてあった。そこで、しばらく待つこととなった。西尾は電話帳から自転車屋を隅から隅まで調べなおし、連絡をして、西尾が必要なプーリがあるかどうか訊いてみたところ、置いてある店はなかった。

そうして、時間を過ごしているうちに隣の自転車屋の主人が戻ってきた。西尾に必要なリレーラーは店に置いてあり、万事O.K.。一件落着となった。

宮崎ユースホテルに到着したのは、21時半であった。21時までに到着するようにとのことであったので叱られると思ったが、事前に連絡しておいたので、仕方がないわねということで許してもらえた。ユースホテルは個人経営のところが多く、規則に厳しいところも珍しくない。消灯が22時と早かったので、急いで風呂に入り、その後、駅前の弁当屋で買ったほかほか弁当を食べた。どうにか山道の120kmを走破し、無事に就寝することができた。



ここまで読みきると、当時のことをはっきりと思い出す。遠く16年前のその場に居合わせている。鮮やかによみがえり、まるで昨日のこのように思い出す。昔のこのことのような感覚はない。頭の中にある引き出しの鍵は開けられる。

最近、仕事に追われ、旅行にもほとんど行っていない。長期合宿のサイクリングは、これからできないだろう。100%爽快な気分を長い間味わっていない。年齢を重ねれば、責任という得体の知れないものを背負うことになり、どんどんと窮屈となり、身動きが取れなくなる。何かを失っている感覚に襲われ、自分の道が正しいのかも疑いたくなる時もある。

妻を失ってから、昔行った旅行のことを特によく思い出す。学生時代は、サイクリング同好会に所属していたこともあり、日本全国色々なところをまわった。北海道合宿、東北合宿、四国合宿、九州合宿、それから近場の関東、とにかく色々なところへいった、色々なものを見たいという欲求が強かったので海外旅行へも行って、ヨーロッパ、アジア各地へと空を飛び異文化に触れた。

満員電車に乗っている最中に、イタリアの風景が思い出され、また、寝る前のひと時に、ハワイのハイビスカスと海が思い出される。もちろん指宿の砂風呂も同様だ。風景が突然現れて、楽しかったその瞬間がよみがえる。旅の瞬間は永遠になる。記憶の奥底にしまわれて、ある瞬間に突然現れる。大事な瞬間は、きっと死ぬまで損なわれず現れるだろう。

約16年前の旅行であるのに、強烈な印象と共に、鮮やかな記憶としてよみがえる。まるで、純一自身の一部のように、記憶は純一の中であらうごめく。

風景はその時の雰囲気を伴って思い出され、感動的な場面、心打たれる景色、状況は、風景と共に胸に刻み込まれる。記憶はふつつつと沸きたつ。ぼろぼろとこぼれるかのように、ぼそりぼ

そり思い出される。渦を巻いて再現され、メルティングポットに温存される。

タイ旅行の記憶と韓国旅行の記憶が混ざり合い、そしてすべての記憶が融合して、それがひとつの楽園へと変わっていく。自分の一部である記憶を豊かなものとするには、やはり旅に出ることだ。旅の記憶は燦然と輝く。

そして、今、純一に差し迫られていることは、記憶を切除するために、すべての記憶を書き溜めておくことだと直感した。

3月9日 やせうま

青春18キップを買って、宮崎から別府まで普通列車で移動した。駅前の温泉民宿に、個室2、500円で素泊りをする。熱い温泉であった。夜はだんご汁、「やせうま」を食べ、酒を飲み、深夜3時ごろになってようやく寝た。

「やせうま」は大分銘菓で、きな粉と水飴と砂糖で練ってあんにして求肥で包んだ生菓子のことで、名前の由来は平安時代までさかのぼる。都から藤原鶴清麿という幼い貴族が豊後の国へ下った際の話で、その面倒見役の女が京都の八瀬出身だったことから、八瀬と呼ばれており、その八瀬が作った食べ物を鶴清麿に食べさせていたという。鶴清麿がこの食べ物がほしいとき「八瀬、うま（食べ物の幼児語、まんま）」と言い、これが語源になったとのことである。決して、痩せている馬からとった肉のようだからとか、そんな語源ではない。はじめはそう思った。

3月10日 久米さんの「寒の地獄」と小早川のナイスプレー

別府ユースホテルで、1年生組と2年生の同級生の大久保が待っているのに遅れてはならないと思い、急いで出発するが、結局、遅れて、9時出発のところ、9時半出発となってしまった。

それから、20名程度の団体となり、冬合宿が始まった。峠を登り湯布院へ着き昼食をとった。コースを決めた1年生の小早川は、進みが遅いので相当にあせっている様子であった。昼食は親子丼を食べる。地鶏ということもあって、ぶりぶりして最高にうまかった。

やまなみハイウェイに入ると山の尾根を走るコースとなっており、アップダウンもなく高地を心地よく快走できた。飯田高原に入ると風がより強くなる。周囲が山に囲まれているこの辺り一帯は「寒の地獄」と呼ばれている。気温は低く、底冷えがする。ここから牧戸峠までの登り坂で事件は起きた。

牧戸峠は標高1,300m。「寒の地獄」と呼ばれるだけあって、頬の肌が痛いほど寒く、上空で冷やされた空気が強烈にこの地へ吹きつける。自転車を漕いでいると汗をかくが、休むために立ち止まると、たちまち冷やされ体温を奪われる。陽が山の陰へと入ろうとしている。あたりは、心なしか薄暗くなっている。そのようなときに僕らは、久米さんが自転車を引きずって歩いている姿を目撃した。

久米さんは1年生の女の子だ。僕らは全員確実にいることを確認するために、最後尾についていた。全員、だいぶ先へ進んでくれたかなと思い、休憩ポイントを出発したが、またたくまに歩いている久米さんに追いついてしまった。大丈夫かと声を掛けると、大丈夫ではないのに、うんと頷き、自転車に乗ろうとする。無理しないでゆっくり行ってみようと言ってはみたものの、本

人は休もうとしない。だいぶ疲れているようではあったが、そのまま状況を見守ることにした。

すると久米さんは、力尽きたようにペダルから足を踏み外し倒れ込んだ。ジョンが久米さんを支え、転倒はしなかったが、足で立つこともままならず、膝が、がくっと折れるようにしてそのまま倒れこむ。僕らはこの事態にどう対応していいのか判断がつかず、おどおどしていた。とにかく、道路脇に寝かせようということになり、西尾とジョンで久米さんの頭と足を持ち、道路脇に寝かせ、あるだけの服を着せ、輪行袋も上から被せた。それだけ、あたりは寒く強風で吹き荒れていた。

久米さんは疲労と貧血とハンガーノックで倒れたに違いないと思い、クッキーを食べるように進めたが、本人は首を横に振った。意識朦朧としているので、こちらも恐ろしくなり、顔を2、3回こすってみた。うつろな眼でこちらを見るので、大丈夫かと訊くと、大丈夫ではなさそうなのに、うんと頷く。それよりも、大丈夫そうではない人に、大丈夫かと訊く、こちらもどうかしている。誰もがあせって、おどおどしていたが、あせっているなりにしっかりするもので、吉波と大澤が久米さんの自転車を分解し、ジョンが通り行く自動車を止め、国民宿舎まで送ってもらうことを頼み込んだ。その自動車はパジェロであり、自転車も乗せられる大きさであった。運転手は親切な方で快く引き受け、自転車と久米さんを乗せて、国民宿舎まで送って行ってもらえることになった。

そうして、残された僕ら四人は陽が暮れそうになる山道を、猛烈に冷たい風の中、猛チャージをかけて、また峠を目指して登っていった。峠に辿り着くと一端休憩を取り、トイレを済ませ一息ついた。あとで記念になるからと思い、そこに居合わせた一人のおじさんに写真撮影を依頼した。

ここからがまた大変で、下り坂は自らのエネルギーを発散させるわけではなく、冷やされる一方になる。手の指は寒さに完全に麻痺してしまい、ブレーキをかけることもままならなくなる。どうしようもないので、指を順番にチュパチュパとくわえながら、指を暖め暖めして山を下って行ったのである。そうして下りきったところの分岐点に差し掛かったところに、小早川が左折に行くようにと大声で叫び教えてくれた。小早川がその場所に立っていなかったら、まっすぐそのままやまなみハイウェイに乗ったまま、どこか見知らぬ土地へ行き、彷徨っていたところであった。本当に小早川には感謝した。

左へ曲がると、国道442号（旧小国街道）で、またしばらく軽い登り坂となった。辺りは真っ暗で頼りになるのはライトだけであった。登っていると、縮こまっていた心臓のポンプが、にわかには復活しはじめ、力強く指先まで血液を流すようになった。いままで指先の芯まで冷え切ったところへ37℃の温かな血液が流れ込むと、指先が痛いような痒いような感覚となった。

そうして暗い道をずんずんと進むのだが、国民宿舎は一向に現れない。不安になって一旦全員止まり、地図を確かめたが、現在地がよく分からない。通りすがりの自動車を止めて道を聞いたところ、このまままっすぐに行けばよいことが分かった。少し走ると国民宿舎が見えた。一向は無事、目的地へ到着した。

国民宿舎の風呂場は、格別広く野沢温泉へ行ったときと同じくらい寒かったが、湯につかると心地よさゆえに身体の緊張もほぐれ天にも登る気持ちとなり、寒の地獄で冷え切った身体を芯まで

温めることができた。

さて、国民宿舎に着いた久米さんは、すぐに部屋で一眠りしたと言う。相当、疲れていたであろう。僕らは明日走るのは無理だと考え、帰らそうとしていたが、起きてきた久米さんは、明日も走ると笑顔で話してくれた。

国民宿舎のおじさんの話だと、久米さんが倒れた地点は別府からだったら自転車でも昼過ぎには通過する場所だと言っていた。僕らは日が暮れそうになる時間に、そこにいた。

3月11日 「荒城の月」付近の非効率な走り

昨日の反省を生かして、走るのが遅くなる女の子と付き添いの大林、吉波が先に出発した。今日はスムーズに時間通り民宿に到着することができた。

女の子を別に分けて班行動したため、女の子がみなと同じ行動をしたいと言って不満が出てきたが、順調に予定通りな走りができたら、元通りの班構成としようということにした。今日は、竹田市までずっと下りであり、平均時速38kmでとばし竹田駅についたのが9時30分であった。予定よりもかなり早く到着した。これから先は、山に入るため、ここで食料を買い込み、しばし休憩した。それから岡城跡（「荒城の月」のイメージされた場所）を見て、原尻の滝を観光する。僕と大澤、ジョン、西尾の四人は、最後尾について走る。自分のペースではなく、かぁーと走って、追いつきしばらく休憩し、また、かぁーと走って休憩するという素晴らしく非効率な走りをせざるえないため、疲労がたまる。吉波と大久保は二人マイペースで走っていたので、今日が一番楽だったと言う。僕らは昨日もつらかったが、今日もつらかった。標高800mから900mの高地では、所々に雪が残っており、更に「ここから1,000m落石注意」と書かれた注意看板が貼られ、山道には落石がごろごろと転がり、崖にも大きな巨石が半分落ちかかり荒れ放題の山道であった。

そのような山道を通り尾平越まで辿り着く。あとの道は下りで、久米さんの自転車がパンクをして西尾が修理したことを除いては、大きなトラブルもなかった。とにかく、休み休みのランにより、呼吸器系や循環器系が長距離ランに順応する状態に到達しない状態で走るので、身体に乳酸菌がたまり、より疲労感が高まることになる。

3月12日 熊田の激走

朝から雨が降ってきたので、サンダルを履いて出発した。どうせ濡れるなら、濡れると重くなる靴よりも濡れても軽いサンダルのほうがよい。高千穂溪谷へ着くと雨は小降りになる。高千穂溪谷は、濃緑の自然の中の柱状摂理の断崖に挟まれた非常に美しい峡谷である。

その峡谷内の切り立った崖の間にボートを浮かし、その神秘的な場に身を置く。男女のカップルがボートを漕いでいる人の過半を占めていたが、男ばかりの僕らが騒いでいたので、雰囲気は少し壊していたかもしれない。昼食は付近で済ませた。何気なしに入った食事処は、予想に反して値段が高く、一番値段の安いカツ丼にすることにした。実は、イノシシ定食を食べたかったが、なにしろ高かったのでやめた。九州のカツ丼はご飯の上にカツが乗っており、その上に卵とじが乗せてある。カツと卵が完全に分離しており、関東のものと少し趣が違っていた。

昼からは次の目標地である高森町へ目指し、ひたすら走る。途中、雨にも見舞われたが、無事に何事もなく到着した。ただ、熊田は高森峠を越えてから九十九曲へ激走し、みんなとはぐれてしまった。僕らが民宿に着いた後に、熊田から民宿までの道に迷ったと連絡が入り、電話を受けた民宿のおばちゃんは、場所も遠いしこれからでは戻るのが夜中になるので、トラックで迎えに行くと言ってくれた。その夜、熊田はトラックの荷台に自転車と共に乗せられ、ようやく民宿へ到着することができたのであった。

その夜におばちゃんが作ったとうもろこしご飯は、頬がきゅっとなるほど美味しく、風呂は地獄風呂のように熱かった。高森峠は阿蘇の外輪山を越える峠である。僕らは外輪山の内側へ入った。

3月13日 阿蘇山のダブルスリップ

今日はいよいよ阿蘇山に登る。女の子は阿蘇山を自転車で登るには厳しいため、ひざを痛めている1年生の大林と近藤が同行してバスで登ることにした。その他のメンバーは阿蘇登山道路を登った。男だけだったため15kmもの道のりを激走し、ロープウェイの発着点まであっという間であった。ギアを軽くし高速回転でペダルを漕ぎ、背中を丸めて必死に山道を登った。

阿蘇山の標高の高いところでは、雪が斑模様に残っている。火口を覗き込むと、距離感が分からなくなるくらいに壮大な穴ぼこが見える。火口付近は、亜硫酸ガスを含む煙が漂い、ひどく咳こんでしまう。注意喚起の看板に「喘息持ちの方は火口へは登らないでください」と書かれていた。

そこで特に驚いたのは、火口付近で、おみやげ用の黄色い硫黄の塊を売っている二人のおじちゃんである。僕らは殺人ガスがやってくるたびに咳き込むにもかかわらず、その二人は煙が来ても何の反応も示さず淡々と、時折笑いながら、会話を続けているのである。

どうやら人間は耐性がつくらしい。火口付近の気温はマイナス2℃。殺人ガスと寒さに耐えられなくなり、昼食をとったあと、早々に山を下りることにした。

下りでは重心を後ろにして、両腕を伸ばし身体を低くし、カーブではグリップを効かせて自転車を倒しながらコーナリングして下る。顔に当たる冷たい風が心地よい。快調に下りを下りきると、先を行った西尾が道路脇に座り、膝あたりを何か手当をしているようであった。訊くと下り坂のワインディングロードで横滑りをおこして転倒したとのことであった。本人は、まったくの予想外のことで、ショックを隠せないようであった。

転倒した場所は左曲がりのカーブであるので、対向車線に自動車が来ていたら大惨事になったところである。一步間違えば、大事故である。背筋が凍る思いがする。西尾の足はひどい擦り傷を負っていた。

現地は、ぱらぱらと軽く雨が降り、薄らと路面が濡れていたのである。路面上の埃の上に水分が落ち、完全に埃と水が混ざる前が、一番滑りやすい危険な状態となる。特に阿蘇は火山灰が降るため、灰によって滑りやすくなっていたのかもしれない。

全員が下りきると、はじめに出発した1年生が待つ場所まで辿り着き、西尾が転倒したということを知らせると、自転車経験が長く体力もある中井が急ににこにこし始めた。気持ち悪いな

と思ったら、中井自身も転倒したとのことであった。その後、二人は病院へ向かったが、不幸中の幸いで、二人とも骨には異常はなかった。

それから今日はジョンが熊本空港から帰る予定であったので、見送りのため大久保、大澤、僕とで他のメンバーより一足早く熊本方面へ向かう。熊本市内へ出るまでは、基本的に下りであり、気持ちよく自転車は風を切って快走した。そしてジョンを見送った。

熊本の夜は、熊本ラーメン、馬刺しを食べるために街へ繰り出した。熊本ラーメンを食べるために桂花ラーメン本店へ行った。麺はスパゲティのようにつるつるであり、スープは豚骨。なかなかうまかった。馬刺しは民宿のおばちゃんに訊くと、その辺の居酒屋に行くのが一番にいいということで「うまかっちゃん」という居酒屋を紹介してもらう。

馬刺し一皿1,500円もするので、五人で2皿しか頼めず、結局、一人あたり3切れしか食べることにできなかった。ただ、これは相当にうまかった。噛みごたえがあり、かつ、舌の上でとろける。

実は、この居酒屋へ入る前に、時間に余裕があったためダイエーに行き、馬刺しを探していたのである。夕方になっていたのでタイムサービス品となり、280円で量もそれなりであった。かなりなお得感だったが、すぐに居酒屋に行こうと思っていたので購入はしなかった。

「うまかっちゃん」で物足りなかったため、僕たちは「うまかっちゃん」を出るなり、ダイエーへ走ったが、時既に遅し。目当ての馬刺しは売り切れになってしまっていた。仕方がないので、かつおのたたきと刺身盛り合わせを買って、民宿に戻ってからの夜のつまみとすることにした。

「うまかっちゃん」では、腹いっぱい食べることができなかったもので、民宿までの帰り道の途中に「火の国ラーメン」に入り、チャーハンを食べることにした。店にはタクシー運転手が大勢来店していたので、ここはうまい店だと確信した。量よし味もよし。みな少ししょっぱいと言っていたが、運動後の食事としてはちょうどよい。ちなみに「火の国」とは熊本の古代地名とのことで「肥の国」とも言う。「火の国ラーメン」で満腹し、先ほどダイエーで買ったものは余計だったなと思いつつも民宿へ帰り、酒のつまみにして食べたが、あまりに量が多かったため、残りは1年生に差し入れしておいた。

3月14日 フェリーで島原港へ

合宿も後半に差し掛かり、みな疲れ気味であった。また、西尾が阿蘇で転倒し怪我をしたこともあり、天草方面の三角（みすみ）まで行かないことにした。

熊本から直接島原行きのフェリーに乗ることに決め、コースを短縮した。そのため、時間が余り、熊本市内で観光をすることになった。民宿のおばちゃんにラーメンの美味しい店を尋ねたところ、新しくできた店がよいとあって「北熊ラーメン」を紹介してもらっていた。「北熊ラーメン」は豚骨スープのように見えたが豚骨ではなく、野菜と鶏がらを煮込んだ白濁のあっさりスープであり、ちぢれ麺を使っている。豪快に豚肉がはいっており、自然と笑みがこぼれてしまう。

次に熊本城を見学したあと街中へ行き、土産物屋を見て回り、試食用のサツマイモが入ってい

る饅頭を食べた。やぶれ饅頭だ。黒砂糖でつくった茶色のものと、白砂糖で作った白いものの2種類あり、味も異なっている。どちらかと言うと、僕は黒砂糖で作ったものの方が好みであった。

その後、フェリー乗り場へと向かう。途中、道に迷うが、周囲にある標識を頼りになんとか辿り着く。白川沿いを走り、周囲を見渡すと、ほとんどの家が日本家屋の瓦屋根であり、屋根にはどの家もしゃちほこが飾られているのが印象的であった。デザインはどことなく熊本城に似ているような気がした。熊本の様式なのであろうか。

フェリーに乗ると、みな熟睡した。修学旅行の女子高生の騒ぐ声や、おじちゃんおばちゃんのぺちゃぺちゃ喋る声に、ものともせず眠りに眠る。

島原港に着くと、眠たげな足取りで自転車を引きずりフェリーを下りる。普賢岳の切り立った急斜面が目に入る。山の上空は黒い雲がかかり、怪しげであった。島原駅に着くと、小早川が待っており、そのまま宿まで案内してもらう。宿の場所を確認してから、島原駅に遅れて着いた仲間を宿に案内するために、大久保と二人で島原駅へと向かった。こうして全員宿へ到着した。宿は大人数をぎゅうぎゅう詰めにして押し込んでやっと入るぐらいの小さな部屋で、ひどく狭いところであった。



もう地上にはいなくなってしまった妻の好きだったソファに座り日記を読んでいた。

純一は旅行に行きたくなってきた。純一に今、足りないものは旅行かもしれない。行き当たりばったりの冒険のような旅行だ。思いがけないことがあるのは当然だ。旅は面白い。もう23時だ。もう眠い。純一が日記を読むのは、過去を振り返らなければならないからだ。純一は37才で、日記帳の純一は21歳だ。

なんら変わるところもないようにも思えるが、生きることによって遺伝子に何かを刻み込まれているような気もする。過去は忘れ去られ、楽園は醸成される。過去の純一は文字によって再生される。

3月15日 雲仙普賢岳の傷跡

雲仙普賢岳と聞くと、テレビ画面に映った火砕流の脅威を思い出す。近づくべき地ではないと身体が反応する。今日は、雲仙を登り、普賢岳を背後から突くように国道57号を激走する。コース設定に無頓着で、はっきり認識していなかったが、今日のコースを聞いて驚いた。道路は開通し、自動車が多く行きかっているのを見て、少し安心したが、あの時の光景が焼きつき、どうも恐怖感というものがついて回る。

火砕流に巻き込まれた消防団の一員が、顔をぶくぶくに腫らして、救助に来た消防車に乗せられて避難する光景をテレビで見たのを今でも覚えている。顔は異常なほど膨れ上がり、のっぺりとした人形のようにであった。この後のニュースでは、その方は亡くなったと報じられていた。それ以後、雲仙の活動がおさまったとも、安全になったとも報道では聞いていない。被災者が不自

由な生活を強いられ、いまだ仮設住宅にも数十人住んでいるとニュースでは報じられており、雲仙と言えれば危険な状況が続いていると思っていたのである。

火砕流が襲ってきた水無川流域では、いま現在でも河岸工事が行われ、トラックがどんどんと通り、火山灰を舞い上げていた。噴火の傷跡を見て、あらためてその脅威を実感した。普賢岳を見上げながらのツーリングは、スリルがあった。ドキドキしながら、走り抜けた。大袈裟かもしれないが、どうか噴火だけはしないでくれと祈りながら走った。もし、ここで噴火して、サイクリング同好会のメンバーが全員死亡したら、それこそ、世の中から非難される。なぜそんな危険な場所へ行くのかと咎められる。もし、そうなったらバカで間抜けな大学生と思われてしまう。まあ、杞憂で終わったので結果よしとしよう。

溶岩ドームは生々しく大きく盛り上がり、過去にテレビ映像で見たものと同じであった。あのよう恐ろしく、どっしりとして動かないぞと言わんばかりの山と、いつも顔を突き合わせて生活している人々が、山に畏怖の念や、畏敬の念を抱くのは至極当然であり、山の噴火によって、人々の命が左右されると考えると、山は神と同等の存在になってくるということも容易に理解できる。自然の包容力を象徴すると同時に、山は自然の恐ろしさも象徴する。島原という土地は、雲仙の山の斜面が、直接海に潜り、海と山の対比が非常に明確である。父性と母性の出会うところ。そういう記号のはっきり読み取れるところである。

雲仙の山を越え、愛野展望台で休憩する。そこで、大澤、大久保と僕は買い物をする。僕は一口香（いっこっこ）、大澤はいかすみポテトチップ、大久保はラッキーチェリー豆を買った。一口香を他のメンバに差し入れすると、瞬く間になくなってしまったが、大久保のラッキーチェリー豆は、ひどく人気がなかった。

あとで長崎について分かったのだが、ラッキーチェリー豆も列記とした九州銘菓であった。ちなみに、原材料がそら豆で、砂糖、生姜、水飴、湧き水を混ぜて絡めてつくった豆菓子で、「第17回全国大博覧会名誉総裁賞」を受賞している。生姜風味の甘い豆菓子だ。長崎人の間では知らない人はいないそうだ。

また、一口香は中国唐饅を改良してできた香ばしい味わいの菓子で、小麦粉でできた皮に黒砂糖、蜂蜜、水飴などを混ぜ、飴を詰めて天火で焼き上げたもので、皮が膨張して中身が空洞となっている。カステラと並ぶ長崎銘菓らしい。

愛野町を抜ける道は、広々とした耕作地の間を通る平坦な道で、今までの山道と比べると安心できる場所であった。今日は諫早に泊まる。

3月16日 長崎グラバー邸からの眺望

朝から雨が降り、みなゴアテックスを着ての出発であった。ゴアテックスとは、汗等の水分を外に出すために通気性ある素材を使った雨合羽のことである。途中、長崎水族館あたりで、近藤がタイヤのチューブが飛び出るといふ、おかしなパンクをして、かなり長い時間、立ち往生した。パンクをした場所からさほど遠くない場所にトンネルがあり、それを抜けると長崎市内に入る。どこの都市とも変わらない風景にがっかりした。市街地の中心部へ進むと、道路にチンチン電車が現れただけで、これぞ長崎という街を感じることはなかった。

どこの都市にもあるビル群と、ただただ交通量の多い幹線道路の風景であった。宿泊場所であるビジネス民宿は住吉にあった。ビジネス民宿は和室と洋室の2種類の部屋があったことから、和室を民宿と呼び、洋室をビジネスホテルだと言いたいのだろうと僕は推論した。

住吉からチンチン電車に乗って、長崎観光をした。チンチン電車はどこへ行っても一律百円と安く、本数も多く利便性ある交通機関になっている。観光通りまで行くと銅座町であり、観光地の賑わいであった。そこで桃太呂のぶたまん、ぎょうざ、三八ラーメンのちゃんぽんを食べ、長崎の味を楽しんだ。

その後、チンチン電車で大浦天主堂へ行き、その奥にあるグラバー園へと足を運んだ。グラバー園へと登っていく時に、ふと後ろを振り返ると、そこには長崎の風景があった。

山の斜面に密集して建っている家々が山を覆い、まるで要塞のように見えた。そこからは長崎の街の全景が眺め渡せる。陸の奥深くまで入り込んだ入江は港となり、大きなタンカーが停泊している。これだけ複雑で起伏の激しい場所に、よくぞ、これだけの建物が建ったなというほど建っている。街は山の急斜面にまで這いあがろうとしている。

このとき初めて長崎に来たという実感が沸いた。この景観こそが長崎だと。グラバー邸もよかったが、眺めのほうが素晴らしかった。グラバー園を下り、また、チンチン電車に乗り平和公園へ行き、平和の像を見て、その日は宿へ戻った。

3月17日 フーコーの振り子

昨日は西尾と吉波と行動を共にした。大澤と大久保は疲れ果てて一日中、寝ていた。今日は、大澤、大久保、吉波と一緒に行動する。西尾は一人早く出発し、広島へと向かった。はじめは平和公園、次に浦上天守堂、次に原爆爆心地を見て周り、昨日の観光と併せると、長崎市内の主要な観光地をほとんど見て回ったことになる。長崎駅へ行き、輪行し空港行き的高速バスに乗るまでの間、大澤と大久保はスロットをしていたが、僕は土産物を買ったり、その周辺をぶらぶら歩いて暇をつぶしていた。長崎駅前には、ビルが建っており、駅からは見えないが、その背後には急斜面の山となっており、その斜面を這い上がるかのように建物が密集している。そこには大きな観音様があるのだが、ビルに見え隠れしていた。路地を曲がると巨大な観音様が近くに姿を現すのであるが、近づこうとすると、また姿を消す。ビルに見え隠れする観音様を目指し、狭い路地を歩き、坂を上り下りした。

観音様を目指して急勾配を登っていくと墓地へと入り込んでしまった。観音様の近くに墓地があるのも当然だと思いつつ、近づこうとするが、観音様へ直接近づける道がなく、観音様の背後に回ってしまったのだ。どうにかして、もっと近づこうと考え、細い路地を行くと境内に入れる道があった。けれども、門は閉ざされていたため、これ以上、観音様には近づけない。もう引き返そうと考えた。

そこでこう思った。せっかくここまで来たのだから引き返すのはなんとも悔しい。境内に入ってしまうと思い、門のかんぬきを抜き、門を開けた。門は重たく動く。境内へ入り、あたりを見回していると、遠くから「おはようございます」と言って、大きな声でどなるような挨拶をしてくるおばちゃんが近寄ってきた。僕を待ちかまえていたようなタイミングであった。「拝観料

200円いただきます」と言われ、少し抵抗したが、それも虚しく訳も分からぬまま200円を取られ「フーコーの振り子でも見ていきなさい」と言われ、フーコーの振り子を内部に吊るしている建物の扉の鍵を渡され、あの建物がそうだと案内された。

その建物の扉を開けると、暗い部屋に振り子があるだけであった。フーコーの振り子とかかれてあった。地球の自転を証明し、コリオリ力という見えない力を実証する振り子だ。天井から長いロープが垂れ下げられ、その先に大きな金属の球があり、ゆっくりと重々しく金属の球が遠くへ行ったり近くへ来たりを繰り返している。しかし、ただの振り子であるので、見るために時間を要さない。すぐに出てきて、鍵を鍵穴につっこみそのままにして、さっさと境内から出てきた。なんだかおかしいことだと思いながら、長崎駅へ向かった。

長崎駅から高速バスに乗り、長崎空港へと向かう。長崎15時25分に出発し、空港16時20分に到着した。飛行機は17時15分出発である。搭乗手続きを済ませ、お土産を買う。商品全般に渡って現地で買うより、かなり高い。けれども、空港で買うほうが荷物にならなくてよいため、ついつい空港の観光ショップを期待してしまう。空港の登場ゲートをくぐる時、大久保は足止めされた。ブザーが鳴る。大久保は、原因はよく分からないが毎回引っかかるんだと話をしてきた。

いよいよ離陸だ。二度目とは言え、まだまだわくわくする。笑ってしまうほどの加速で飛行機は走り出す。離陸し、とてつもない角度で飛行機は上昇していく。往路の飛行機よりも角度がある。そのまま失速しそうな感覚がして背中に一滴の汗が流れる。左に旋回しながら、ねじるように上昇し、そして反対に右旋回して、まだまだ上昇する。

その時に、思いもよらぬ幻想的な風景が目の前に現れた。小さくなっていく大地の様子が下に見え、眼と同じ高さくらいに白い叢雲の層が延々と果てしなく見える。そして、その雲の大地に突き刺さるような光を放つ太陽があった。天上の神々の会話が聞こえてきそうな程の美しさであった。僕はその一瞬の間に通り過ぎた景色を忘れない。強烈な印象が胸に突き刺さる。

それからあとは、羽田空港へ着くまでは雲の中を飛び続けた。ただ、白い色と微妙に揺れている翼が見えるだけであった。長時間、雲の中にいて抜け出して見えたものは、東京の夜景であった。宝石をちりばめたように小さな光源が無数に輝き、配列され、地平線の彼方まで広がっている。夜空の星々が降り立ち、光の海が地平線の彼方まで広がる美しい光景であった。

だんだんと地上に近づくにつれ、もう夜になっていたが、街の起伏も見えるようになってくる。それは小さなミニチュアそのもので驚くべき精巧さで作られている。当然のことで、それは人が住んでいる本物の街である。素晴らしく綺麗な夜景であった。ライトアップされた東京タワーは幻想的であった。羽田空港に着くと、雨が降っていたため滑走路が濡ら光っていた。空港は混雑しており、格納庫前に降ろされ、バスでロビーまで送られた。このようにして長い長い旅は終わった。



飛行機の到着後の16年後、純一はすべてを失っていた。妻の服やブーツ、バック類、家具や食器類等家にあったものは、友人、親戚へ配れるものは配り、大事なものは純一の手元に置いた。

最新式のドラム式乾燥機付の洗濯機は純一の妹家族へ、その他家にあった家具はすべて処分をした。処分したものは2 t車2台分もあった。そして、家の中を空にしてから、家そのものを売りに出した。妻と家探しをしてやっと見つかった家だ。家のファサードは、妻がこだわりデザインしたものであった。売却が完了するまで半年かかった。純一たちが築いてきたすべてがなくなった。妻も家もなにもかも。

「奥さんと関わりあるものは、この人からすべて引き離して！」

葬儀の時に、遠くの親戚にあたる人が、純一の両親に話していた。事実、そのようにした。そうしなければ、純一は悲しみの海に溺れ、身を滅ぼしていたかもしれない。今は思い出の家まで売却して、両親の家で暮らしている。今までの生活がすべて記憶に変わってしまった。始まるためには、終えなければならない。先へ進むためには過去を整理しなければならない。

愛は永遠ということに間違いはないと思う。妻は永遠のものとなった。亡き妻のことをこの2年間、思い返さなかった日はない。これからも、いつも共にいるだろう。だが、妻との記憶も16年経てば、細部は忘れ去られてしまうのであろうか。16年前の強烈な出来事であったサイクリング九州合宿で起こった事柄と同じように、日常の記憶の中から消えてしまうのであろうか。記録しておかなければならない。記録さえしておけば、頭の中の引き出しの鍵はいつでも開けることができる。だが、今は、その記憶も強烈すぎる。その作業に耐え切れない気がしている。涙はニトログリセリンのように、少しの刺激を与えれば爆発してしまう。

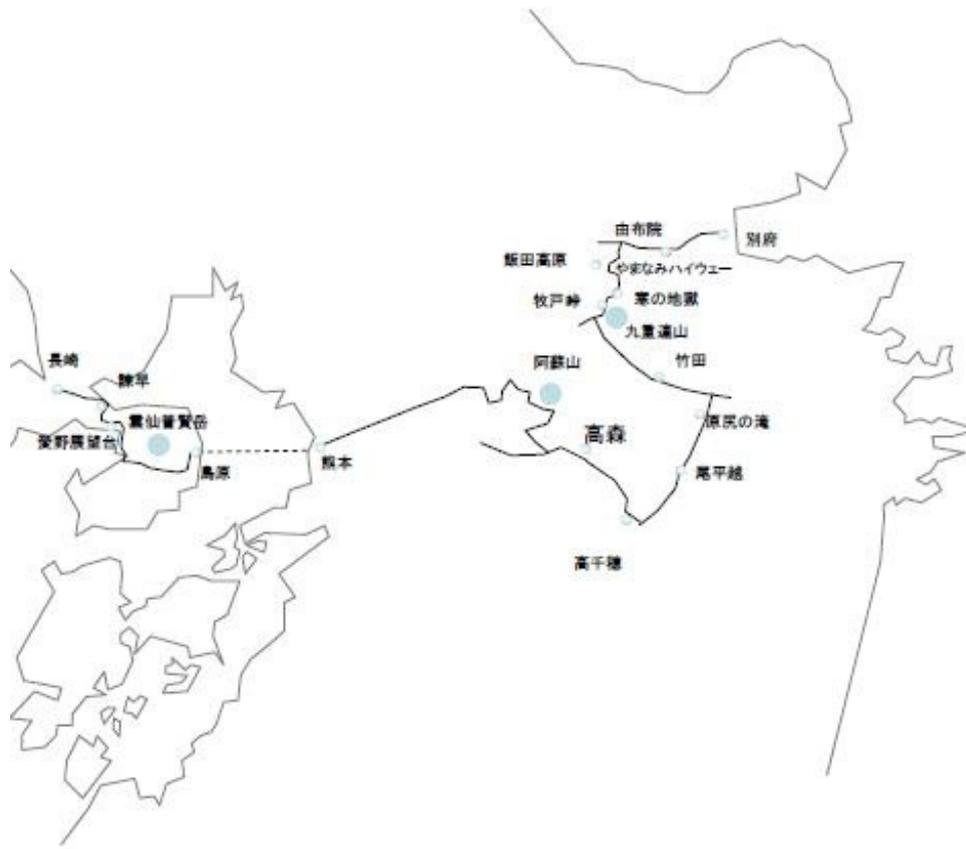
純一は過去と現在とを行ったりきたりしている。純一のもものはすべて壊れてしまった。「乙女の祈り」を作曲したポーランドの無名の乙女も、今から約150年前の人だという。たった150年だ。当たり前のように全世界の人が知っている楽曲だ。もっと昔からあってもおかしくもない気がする。純一の亡くなった祖父が生まれたのは96年前だ。大政奉還は143年前。純一が生まれたのは37年前。そして妻を亡くしたのは2年前。明治維新を導いた坂本龍馬が、京都近江屋で暗殺されたのが33歳。龍馬を体制側から支えた薩摩藩家老小松帯刀も34歳で没した。生き過ぎたるや37。西郷隆盛、大久保利通、明治新政権を発足せしめ、今の世の礎となり尽力した。知覧特別特攻基地から飛び立ったのは、20歳前後の若者であった。純一の命は奇跡的に繋がれている。もう少し冒険を続けることも悪くはない。

map - 南九州



南九州

map - 中央九州



中央九州

3. 鉄道敷の楽園は今もある

純一が実家の家の玄関扉をあけると、優実が飛び込んできた。優実はおじいちゃんとおばあちゃんの家遊びに来ている。

「おじちゃん、こんにちは！」

「びっくりするじゃないか。飛んできたらあ。ピアノのレッスンはどうだった？」

「うん。私ね。来年の2月、ピアノ発表会なの。その日はね。私の誕生日なの」

「そうか。2月23日だったな。おじちゃんは、優実の発表のときに、おじちゃんが花束を贈るからね！ いい？」

「う～ん」と少し照れたような素振りを見せて、

「私の弾く曲は、よちよちペンギンに決まったよ！ 今日、先生から言われたの」

「どんな曲？ 楽譜はある？」

「これ！ まだ、弾けないけど。おじちゃん、弾いてみて！」

「いいよ」といって、純一は、楽譜を広げて「よちよちペンギン」を弾いてみせた。優実は満足そうに笑って、その後、ソファーの上に乗って、飛んだり跳ねたりした。

それを見た純一の母は、だめだめ、優実、と言いながら、優実がソファーの上で、跳ねるのをやめさせようとしていた。父の高明はにやにやと笑っている。

優実は、マンションより戸建住宅のほうがいいと言っている。なぜなら、どんどんと飛んだり跳ねたり自由に遊べるかららしい。きっと、妹に、マンションだから、飛んだり跳ねたりすると、下の階の人に迷惑だから、やめなさいと言われているのだろう。優実が来ると実家も明るくなる。

子供がいる場所は楽園のようなもので、また、自分の子供時代も楽園である。だが、そう気付くのは、だいぶあとになってからだ。妻が亡くなるほぼ1年前に、純一は母方の実家の福知山を訪れた。そのときのことを日記に記していた。記憶の中の楽園は壊れない。

2008年1月4日 鉄道敷きの風景

この正月、十数年ぶりに、母方の実家の福知山を訪れた。福知山は、子供のころ、小学生までは、毎年夏休みには1ヶ月間ほど帰っていた。単純に考えると12歳まで毎年帰ってるとすると、1ヶ月×12回=12ヶ月、つまり1年間は住んでいたといえる。けれども、私にとってそれ以上の場所である。

福知山は、子供の頃の夏休みの思い出がたくさん詰まった場所である。やさしい祖父母の迎えてくれるあの場所であり、いとこ達と遊びまわったあの時であり、毎日のように蝉取りをした場所なのである。市民プール、千切屋の踊りせんべい、岡から駆け下りるジェットコースター三輪車、穴が開くビーチサンダル、祖母が用意してくれた西瓜、なにもかもが楽しく、暑くあたたかい夏休みの記憶そのものなのである。とにかく走り回って、そして新しい遊びを考えたり、自由時間がどこまでも続いた。父母・おじおば・親戚が寛ぎ、笑顔が集まり、ゆったりとした時間が流れていった。祖父は、よく私を岡の下のきんこんかんこん（踏切）まで連れて行って、汽車

が通るのを見せてくれた。踏切の近くから遠景に鉄道敷きが広がっていた。祖父のぶっとい指、骨太の手、腕、祖父の僕を見る顔は、笑顔しか思い出せない。

ところが、あの懐かしい風景が壊された。子供のころの懐かしい思い出の舞台が壊されていたのである。プラットホームに降りると、そこはもう何処だか分からない別の場所であり、駅舎も駅前広場も様変わりし、駅前の道路も完璧に整備されて新しくなっていた。線路は高架となり、踏切も広い鉄道敷きもなく、別の場所へと成り代わり、私の頭の中にある風景が完璧にごちゃごちゃにぶち壊されていた。おそらくはじめて来た人は、なかなか整備されていたよいところですねぐらいのことは言うであろう。正確に言えば、壊されていた、ではなく、整備されていた、であろう。ただ、私としては、ショックであった。記憶そのものがぶち壊された気分がしたのである。

確かに、あの場所あの風景は私の楽園である。この先これ以上ないといえる楽園である。何もかもが楽しくて、何もかもが自由で、何もかもが最上で完璧な時間と場所なのである。現実の風景に私の心は痛かった。啞然とさせられた。

「けれども、十年以上来てない自分が悪い。その間、少しでも来ていれば、少しずつ微調整できたはずだったのに。変化は当然のこと。変化するから人は幸せなんだ。私への課題は、記憶と風景の関係とか、風景が人に与える影響だとか、風景の意味だとかそんなものだろう」と、数時間して思えるに至った。

このように、街が変わってショックだったという話を妻に話すと、妻は答えた。

「それが都市計画というものでしょう。あなたは都市計画専攻だったんでしょ」

それもそのとおりだ。妻は頭がいい。一言で、すべてを語った。

古い物は残すべきだとは、言わない。けれども、この一連の体験から「シンボリックな風景を壊されると人は傷つく」ということだけは言えると思う。人は、どの風景を記憶のシンボルとするか分からない。おそろしいことだ。

あまりの変わり様にあわてた私は、母方の実家の周囲を散歩してみた。そうすると、三輪車で駆け下りた坂道やその脇にある石垣は、そのままの姿であった。私は少し安心した。

福知山のあの時のあの風景あの場所は、私の楽園である。それをそっと自分一人のものとしてしまっておくことにする。記憶の中のものとなってしまったが、楽園の記憶が壊れた訳ではない。



優実が帰り、部屋の片づけをした後、自分の部屋のソファに座ってステイシー・ケントのアルバム「Breakfast on the morning tram」を聴きながら寛いでいた。純一は妻との会話を思い出していた。記憶は脈絡なく突然に顔を出す。何かと何かが繋がったのであろうか？ ふいに現れる。ふいに。

どこの街だか忘れてしまったけれど、すごく気候のよい頃、オープンカフェで、妻とお茶をしていた時のことである。

「私はね。小さいころは、はずかしがりやだった」

「ぜんぜん想像できないな」

「そう思うでしょ。でも、そうだった。人のうしろに隠れて、はじめて会う人を、じっと見てるだけ。そんな女の子だったのよ。でも、かわいくて人気があったのよ」

「それは今でも同じだ」

「今は違うわよ。でも小学生の3年生頃から人気が出てきたの。そうそう、私、学校の吹奏楽のパレードのバトンワラーだったのよ。みんなの先頭を歩いて、バトンを振り回して全体を指揮してたの。すごいでしょ！ 中学生の頃も、もてたわ。1年生の時には先輩と付き合って、下校時には一緒に帰ってた。ある時、学校の校庭の芝生に座っていたら、その先輩が来て、横に座ったかと思うと、突然、頬にチュッてキスしてきたのよ。私、何がなんだか分からなくて、そのまま立ち去っていく先輩に向かって、バイバイって言ってた。今から考えるとバカみたい。ホントに何があったのか分からなくて」

「そいつはカッコいい先輩だったのか？」

「そう。でも、それからすぐあと、その先輩が他の女の子と一緒に歩いている姿を見たりして、あと噂でも、何人とも付き合っていると聞いてから、だんだんと距離が離れていったの」

「ひどいな」

「わたし騙されていたのかな？」

「カッコいい奴ほど、そういうことするからな。僕はムリだけど。そんなに器用じゃないし」

「それから、なんか、男の子を信じられなくなったの。そして、次に付き合ったのは、高校1年生の頃。野球部の男の子だったわ。付き合って1ヶ月ほどして、私は言ったの。別れましょうって」

「えっ??? どうして」

「私、怖かったの。付き合っているけど、いつ、また別れるときが来るのかわからないでしょ。そう考えると、付き合うこともできなくなっちゃって」

「本当に理由はそれだけだった？」

「そう。それだけ。その後、その人は荒れてしまって、暴力を振るうようになるしタバコも吸うようになったし、おかしくなっちゃったの」

「ふられてか？」

「そうだと思う」

「相当彼は傷ついたんだな」

「でも、私は付き合っても離れて行く時のことを考えると・・・」

「中学生の時の先輩が悪いんだな」

「その後は、大学生の頃、付き合ったんだけど、彼が3年生になって校舎が別の場所に移ったときに、彼も住む場所も変えたの。そして、私は驚かそうと思って、突然彼の家に行ったところ、逆に、彼に突然来るなって怒られたのよ。そのときはショックで、相当落ち込んだ。それからかな。なんか彼との関係がおかしくなったのは」

「よく分からないな。彼の態度」

「彼はあまり話さないし、どちらかと言うと無口なほうだったかな」

「僕と同じだな」

「あなたよりも喋らなかったわ。考えていることが分からなかった。そして、次はあなたよ。あなたに出会えてよかったと思っている。なんか、よく分からないけれども。理由はよく分からないけど。なんか、いいみたい。特にこれといってすごいとか、素晴らしいとかないけど、すごくいいかんじみたい。純一のこと好きよ！でも、時々思うのは、なんで、私のことを好きになってくる人があなたしかいないのって。私が好きになる人は、私を好きにならない。なんでなの？」

「知らないよ」

「そういうもんかな。分からないな。でも、考えるとやっぱり、そうなのかなって思う」

「なにが？」

純一は淡い気持ちとなっていたが、はっと我に返った。手元には日記帳が半開きになっていた。どうみても綺麗な字とは言えない文字が並んでいる。ローマ・フィレンツェと書かれてあり、ちょっとした挿絵まで描かれている。そういえば、これがはじめての海外旅行だったと思い出した。読み始めると当時の感覚が舞い戻る。大学3年生の時に塾講師のアルバイトをして貯めたお金で旅行へいったのだ。1996年のことだ。

4. ローマ・フィレンツェが再び溢れる

1996年2月16日 帰国と回想

成田に降り立ったときには、小雪がちらついていた。話が違ふ。機内放送では、東京は5月中旬並みの暖かさだといっていたのに、それは昨日のことだったのか、到着した日から3日間、雪は降り続けた。東京は朝9時。イタリアでは、これから眠る時間だというのに、時間が早く進みすぎたせいで、目がしばしばしている僕らは、また一日中、起きていなければならない。機内から感動的な日の出を一瞬だけ見ることができた。ほんの一瞬であった。飛行機が左に旋回したときに、翼が少し下にさがり、そこから真っ赤な太陽が顔を見せた。

飛行機は再び水平になり、太陽は翼の影になり、なくなってしまった。陽が高く上ると眩しすぎて、太陽をまともに見ることができなくなった。機内放送で映画「マディソン郡の橋」を見た。いい映画だった。半分泣きそうになる。ただの不倫映画だという人もいるが、それ以上のものだと思う。家に着き旅行ケースをあけ、家族に土産物を渡す。まだまだ、イタリアの香りが残っている。それでは、8日間の旅を思い返すことにする。

2月9日 離陸と隣の席の女の子

長い一日が始まる。イタリアは日本時刻よりも8時間遅れているので、その分だけ一日が長くなる。飛行機はエール・フランス航空。パリ経由でローマへ飛ぶ。パリはシャルル・ド・ゴール空港、ローマはレオナルド・ダ・ビンチ空港に降り立つ。成田からパリまで12時間あまりの機内での監禁状態はしんどい。機内は飲み放題であったので、シャンペンばかり飲む。おかげで、頭がふらふらしたが、ほろ酔い加減で気分がよい。

機内食は2回。なかなか美味しかった。エール・フランスだけあって、フランスパンが出てくるが、日本のフランスパンより硬い。イタリアでも同様であったが、ヨーロッパのパンは、硬くて口の上顎にあたり痛くなってしまふ。日本人は米を食べるが、なんて柔らかいものを主食としているのだろうと今更ながらに思う。とにかく、パンはどこへいっても硬かった。

隣の座席に座っていた女の子二人組は、どちらも可愛い。美人系であった。声を掛けたかったが、なんだか気が引けた。その時はやめておいたが、あとで話すことになった。

搭乗員は、ほとんどフランス人で、一人の男性搭乗員は絶えず笑顔で乗客にサービスしていた。スチュワーデスも目鼻立ちの整った女性ばかりで、やはり顔のつくりが違ふなと感じた。12時間の監禁時間をあきさせないために、至れり尽くせりのサービスを提供する。乗客は日本人が大多数を占めていた。

機内では、完全システム化された野菜工場のように、野菜には必要な養分を与えておいて、とりあえず満腹してくれと言わんばかりであった。12時間も狭い椅子に、ずっと座っているというのは無理な注文だ。機内食についているケーキは、さすがフランスだけあって美味しいものであった。少し日本のケーキと味覚が違ふ。機内放送では、2本の映画が流されたが、どちらも面白そうではなかったので見なかった。

飛行機の航路はロシア上空を通るもので、画面上の飛行情報では、高度11,000m、外気

温度マイナス60℃からマイナス80℃であった。燃料は全重量の1／3というのだからすごい。僕らの座っていた座席は、機内のちょうど真ん中であったので窓の外を見ることはできない。パリのシャルル・ド・ゴール空港についても、まだ外は明るかった。

パリでは、乗換え待ちの時間があつたので、うろうろと免税店を見て回る。時間になり、25番ゲートへ行ったが、ローマ行きは24番ゲートだと言われ、少し戸惑ったが、なんとか、ローマ行きのエアバスに乗り込むことができた。

飛行機が飛び立つときには、シャルル・ド・ゴール空港は闇に包まれていた。窓から見たフランスの夜景は、オレンジ色の光で街の骨格が表現されていた。その後、ローマの夜景も空から見たが、同じようにオレンジ色の光で統一されていた。暖炉の残り火のようであった。しばらくして、睡魔に襲われ、そのまま眠りについた。

レオナルド・ダ・ビンチ空港に着くと、パスポートを見せて、スムーズに入国でき、出口ではツアーの現地スタッフが待っていた。どんな人が同じツアーなのか、楽しみにしていたが、思ったより少なく六人しかいなかった。成田・パリ間で隣の席だった二人組の女の子と一緒にあつたので、気分も高揚してきた。あとの二人は、子育てを終えて一段落ついた初老の夫婦であつた。こちらは僕と神崎と二人で会った。この六人で、ホテルまでバスで一緒に乗り合わせた。

バスに乗るまで、飛行機からの荷物がなかなか降りてこないのと、運転手が見つからないのとで、出発するまで時間がかかった。その待ち時間に100ドル分を両替しにいった。

バスの中では、女の子二人組と隣り合わせになり、話すことができた。彼女たちは働いており、有給を取って旅行に来たのだという。海外旅行は2回目で前は今年の夏にいき、半年、お金をためて今回、また海外旅行ができたのだという。出身は東京だ。

てっきり同じホテルに泊まるものと思っていたが、彼女達だけ他のホテルということで、非常にながかりしてしまった。僕と神崎と初老の夫婦を乗せたバスは、同じホテルに降ろされて、彼女達は別のホテルへとそのまま別れて、その後、会うこともなかった。

リージェンシーホテルは4つ星ホテルで、僕らが思い描いていた以上のものであつた。ホテルに着くと、竹内さんという日本人ガイドが待っており、諸説明を受けた後、ホテルの部屋へ入り、シャワーを浴び、ひたすら寝た。

2月10日　ローマ市内のまち歩き

眠たい目を無理にこじあげ、7時半に起床し、地下1階にあるダイニングルームで朝食をとる。バイキング形式で、硬いフランスパンとおかしパンが、山盛り積まれてあつて、ハムチーズ、コーンフレーク、オレンジジュース、グレープフルーツジュース、ヨーグルトがあつた。

9時にホテルを出発した。ローマの朝の空気は軽く、適度な寒さはほどよい刺激となった。最初の目的地は、スペイン広場である。ロマグナ通りを進み、右に曲がり、道幅のあるボンコンパグニ通りを歩き、ヴェネト通りを横切る。まっすぐに進み、突き当たった所を左に曲がり、次に右に行くと、スペイン広場である。

はじめに目に入ったのが、トリニタ・ディ・モンティ教会である。スペイン階段上に出現したのは思いも寄らなかつた。映画「ローマの休日」で映し出された光景と、ちょうど反対側から出

てしまったのだ。階段上から見てちょうど正面にバチカンが見える。スペイン階段を下りて、映画のワンシーンと重ね合わせるように見上げ、また階段を上がり、ヘップバーンがジェラートを食べてたあたりに腰掛けた。朝から観光客は多く、ヨーロッパのどこかの国の修学旅行生が沢山群がっていた。広場にはジェラートは売っていなかったが、花束が売られており、3台ほど馬車があった。

スペイン広場から北へ上がり、ポポロ広場へ入る。ポポロ広場の中央は駐車場になっていた。こんな広場を駐車場に使うのは不恰好なので、やめておいたほうがよいと思うのだが、街を歩き回って分かるのだが、ローマには駐車場というものが無いに等しい。だから、目立つのは路上駐車、広い通りとなると2重に路上駐車になり、その車と車の間隔も5cmほどもなく、どうやって車を出すのか不思議に思える。また、駐車方法は、通常、道路に対して水平に置いてあるのだが、直角に置いてあるものもある。古代ローマ人は駐車場を念頭に置かずに都市計画を考えたらしい。

ポポロ広場の東側にピンチョの丘がある。ここを登るとローマを一望できる。正面にはバチカンが見え、左手には、その時には何の建物か分からなかったが異常に大きな建物がそびえ建っていた。あとで分かったのだが、それはヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂であった。とにかく、遠目から眺めると、大地から突き出る突起物のようで、丘のような建物であった。ピンチョの丘は地元の高校生の溜まり場なのか、原付バイクをブーブーとならしていた。ポポロ広場に面して、コルソ通り入口の門のように、サンタマリア・ディ・モンテザント教会（左）とサンタマリア・ディ・ミラーコリ教会（右）がある。これは、ちょうど双子のようだから通称「双子寺」と呼ばれている。

ポポロ広場から西へ行き、テヴェレ川沿いに歩く。この道こそ路上駐車が2重になっているところで、滑稽な風景であった。それからアウグストゥス帝廟を外から眺め、カヴェール橋でテヴェレ川を渡り、川沿いを歩くと裁判所が見えてくる。白亜の建物でファサードが浮き彫りで埋め尽くされており、突然、現れ驚く。

そこまでくれば、城の上に天使が現れペストが絶滅したといわれるサンタンジェロ城が真近に見られる。川沿いを歩き、サンタンジェロ城の前を歩いてゆくと、目の前にはサンピエトロ聖堂へ向かうコンチリアツィオーネ通りが大きく構えて参拝者を迎えている。視線を左に移せば、サンタンジェロ城の華やかさに心奪われる。橋の上に何人もの大男たちが立っており、その力強さに圧倒される。

サンピエトロ広場では、多くの人が立ち尽くしていた。広場を囲む列柱や聖堂を眺め、その空間を味わっているかのようであった。これがヴァチカンなのかと人々の表情は興奮気味に晴れやかだったように感じられた。聖堂に入り驚いたのは、何もかも規模が大きいことであった。天使の彫刻にしても、柱の大きさにしてもどれをとっても大きい。

入口のすぐ脇に、ミケランジェロの傑作である「ピエタ像」がある。人々が群がり興味深そうにガラスケースに入った彫刻を見ていた。聖堂内部の装飾は過剰気味で、大きな彫刻がでこぼこに至る所に盛り上がっている様式を見ると、シンプルなものを好む日本的感覚からすると、気分が悪くなりそうなくらいであった。けれども、ひとつひとつをよく見ていくと彫刻や絵画の迫力

は差し迫るものがあり感激する。

サンピエトロ大聖堂はルネサンス最大の芸術家ミケランジェロにより身廊と円蓋が設計され、聖堂前のサンピエトロ広場はローマ・バロック代表のベルニーニにより設計されている。大聖堂は16世紀から17世紀にかけて大芸術家らにより心を込めて作られていることが、建物や彫刻から得られる衝撃から伺い知れる。

8,000リラ払い、ドームの屋上まで上ってローマ市内を一望した。途中までエレベーターで行けるが、それから上は、細い螺旋階段を上ることになる。螺旋階段の上部では、壁が斜めになり、身をかがめなければ通れない。ようやく狭い所から抜け出ると、ローマを見渡せる一大パノラマが広がる。ここから見るとよく分かるのだが、ヴァチカンには城壁で囲まれていて、その内側は庭園になっている。いわば、日本の皇居のようなもの。街全体は茶色っぽい色彩で統一されている。

聖堂に入る前に広場横の道を左へ少し行ったところに、地元の人が行くようなピザ屋があったので中へ入る。匂いが嗅覚を刺激し、その信号が脳みそへ伝わり結果としてピザ食いたいという衝動となってアウトプットされた。

ピザの大きさを指定し重量を測ってもらうと金額が表示される。目が大きく、ふくよかなイタリアの女の子の店員が、笑顔でピザを渡してくれた。1,900リラ、日本円で140円。大きさも食べるのに適当で、味も美味しかった。よい店を見つけることができた。やはり、買い物は地元の人が行くようなところが一番いい。

サンピエトロ寺院を出て、美術館へまわったが、すでに休館になっていた。ヴィットリア・エマニュエル橋で、テヴェレ川を渡り、ナヴォーナ広場へ向かった。途中、パスタを売っている小売店があり、神崎がお土産を買うために入った。そこで3つほど乾燥パスタを買って、そのうち1つをイタリア・北海道パーティーで料理をして食べた。イタリア・北海道パーティーとは、大学の友人で集って開いたもので、神崎と僕はイタリア、他の友人3名は北海道へ旅行して、そのお土産を持ち寄って、うまい物を喰うという企画である。もちろん男だけだ。

そこは地元の人が利用する店と言った感じで、レジに座っていたおじいちゃんもとても陽気で親切な人であった。グッバイ、チャオと大きな声を出して店を出た。

ヴィットリオ・エマヌエレ2世通りを下ってゆき、パリオネの細い横道に入ると、急に視界が広がる。そこは、四大河の噴水があるナヴォーナ広場である。ベルニーニ作のこの噴水の彫刻は四大陸を表すドナウ川、ガンジス川、ナイル川、ラプラタ川の四本の河神の擬人像が配置されている。ローマの街には物語が溢れている。

ナヴォーナ広場には多くの人々が集っており、絵描きが旅行者達の自画像を描いている。広場にいると何かいづらさを感じ、来てはいけないところに来てしまったという感覚になる。このいづらさは地元の人溜まり場となっていたからであろうか。それともツーリストを待ち構えている商売人たちの視線によるものであろうか。

歩いていると怪しい日本語で「こんにちは・・・」と手に糸をもじって、いじくりながら話しかけてきたが、すぐに「ノン、ノン、ノン」と言って、振り切りように歩いた。広場に面する建物にはバルが入っていて、その店先にはテーブルと椅子が並べられており、くつろいだ客たちが顔

を赤らめて大声で笑ったり話したりしていた。

そのまま、ナヴォーナ広場を通りすぎ、パンテオンへ向かった。パンテオンの前のロトンダ広場も同様に、地元の人々が大きな顔をして居座っているように感じられた。パンテオンでは、天窓から入る神々しい光を浴びた。

それから地図を確かめずに憶測しながら道を進むと、突然、白亜の宮殿が現れる。門は閉まっていたので、その裏手に回ってぶらぶらと歩いていると、ハンバーガーを売っている露店を見つける。ハンバーガーは6,000リラ。量はあったが、パン生地はパサパサで、具はサラミとチーズだけ。はじめは食べられたが、途中で飽きてしまう。ハンバーガーを食べたのは、サンタマリア・イン・アラコエリ教会前の階段であった。その教会にはゲッセネマの園から持って来たオリーブの木の彫刻「サント・バンビーノ（幼児キリスト像）」が祭られている。散歩に夢中で教会の中へ入ることはなかった。

食べ終わると、すぐ隣にある幾何学模様のモザイク床が特徴的なカンピドリオ広場へ行き、すぐ裏手にあるパラティーノの丘へ上ると、眼下にローマ発祥の地とされるフォロ・フォーマーナが姿を現す。その後は、ヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂の前を出て、その前に広がるヴェネツィア広場に出た。

コルソ通りから横道へ入り、クリナーレ宮殿横の広場へ出る。階段を上り、広場へ入ろうとすると、数人の警官が立っており、行く手を阻もうとしていた。なにやら、迂回して向こうへ行けということを行っているらしいので、その通りにして広場を見たら、広場の周りを人々が取り囲んでいた。何かあるのかと思い、人ごみの中1時間ほど待っていたら、楽曲の演奏と衛兵の行進が行われる衛兵交代式がごった返す人ごみの中賑やかにとり行われた。終わってみれば、ただの行進だけであったような気もしたが、ローマの行進を偶然にも見ることで幸運であった。

そして、クリナーレ宮殿を後にして、狭い路地を抜けると、トレヴィの泉に遭遇した。これがトレヴィの泉かと思いつつ、泉の前で、人々がくつろぎ、穏やかな表情で時を過ごしていたのを見た。中には酒を片手に足元があやうい三人組の連中もいたが、観光名所らしい観光地であった。その後、トリトーネ通りを通過して、バルペサーニ広場からヴェネト通りに入り、ホテルに帰った。

ホテルに着き、1時間ほど休みを取り、19時頃にホテルを出て、近くのいなかつぼい昔からあるようなレストランに入った。メニューがイタリア語で書かれてあったが、イタリア語の下に小さく英語で書かれているのを頼りに注文した。はじめに、トマトソースのかかったやわらかいパンをテーブルの上にどんと置かれ、スペシャルサービスといって、サービスされた。なんだか、ぼったくられはしなかいと不安に思いつつ注文した。次に、フランスパンの入ったバスケットが来て、ジュースも来た。そして最後にスパゲティーが来た。僕はピリッと辛いミートソースのスパゲティーで、神崎はブロッコリソースのスパゲティーであった。僕よりもさらに辛味のあるものだった。スパゲティーは腰があり美味しかった。量は期待していたものよりも少なかったが、満足できる味であった。

昨日は、晴れ上がっていた空も朝起きると、どんよりと雲ったさえない天気であった。ホテルの部屋の中は、暑すぎるくらいの暖房がかかっていた。昨日と同じようにダイニングルームへ行き、朝食を食べ、9時にホテルを出発した。今日の予定は、カラカラ浴場まで一気に地下鉄で南下し、そこから北上するというものであった。テルミニ駅まで徒歩で行き、そこから地下鉄（メトロB線）に乗り、ピラミデ駅で下車した。下車した方向が、カラカラ浴場側の出口と反対側であったと知らずに、この方向だろうと憶測で歩いていたら、テレヴェ川へぶつかり、まったく正反対の方向に来たことに気づいた。しかし、ここまで来てしまった以上、戻るのも億劫なので、そのまま北上して「真実の口」を先に見ることに決めた。

だいたい、この辺りにあるはずだと思いながら歩いていたら、ある建物の隅に日本人観光客が群がっていた。何があるのかと近寄ってみると、そこにはヘップバーンが手をかまれそうになった「真実の口」があり、その前に観光客が並び記念写真を順番に撮っていた。

そこはサンタマリア・イン・コスメティン教会で、ここに来る途中、高い塔が目立っていて、ずっと目印にしていた建物だけあって、まさか、そこに「真実の口」があるとは知らずに来てみたらそうであったので非常に驚く。僕らも他の観光客に交じって、記念写真を撮った。

奥にあるパラティーノの丘を横目に、チルコ・マッシモ通りに行く。チルコ・マッシモは大きな草原で僕らが通ったときには、少年達が野球をしていた。ムラノ・ジノリの食器店に行くが、値段が高すぎて話しにならない。客は日本人だけであった。店員も日本語を話していた。神崎が気に入ったガラス細工の置物の値段を聞いたら8万円もすると言う。そのまま店を出て、カラカラ浴場へ向かおうとしたが、道に迷い住宅地へ入り込み行ったり来たりしていたが、神崎が地図を見て、おおよその方向を見当して坂を下っていくと、カラカラ浴場のすぐ横道に出ることができた。

日本人の女の子が二人出てきて「写真を撮ってもらえますか」と頼まれ、シャッターを押し2枚ほど撮ったあとに「カラカラ浴場はこの辺ですか？」と訊くと、すぐそこだ、と教えてくれた。こうして、第一目的地のカラカラ浴場によく辿り着くことができた。

カラカラ浴場の規模は大きく、古代の遺跡らしく茶褐色の崩れかけた土の山のような様相を呈していたが、巨大なアーチや幾何学的な模様の入った緑の床が残っており、当時をしのばせていた。天井は、壊れかけていたにせよ、その高さに驚く。ローマ帝国の偉大さを感じる。カラカラ浴場の構内でも、たまたまその場に居合わせた二人組の女の子に写真を撮ってくれと頼まれた。僕らも二人で撮った写真が少ないので、頼んで撮ってもらう。双方、取り終えたら、順路は同じ方向となるので、一緒に歩きはじめる。何も話さないのはおかしい感じがかったので、お互いに話を始めた。浴場の内部でも写真を双方に撮り合うことになった。

一緒に写真も撮った。カラカラ浴場を出て、どこへ行くのかと聞くと、「真実の口」であり、僕らはコロッセオへ向かおうとしていた。途中まで一緒であったが、彼女たちは左、僕らは右という具合に分かれた。最後に、またどこかで出会えたらいいね、といってバイバイをした。そのあとに100m位歩くと、パタパタと足音が聞こえて、今夜、食事を一緒にしてもらえませんか、と言われた。断る理由はどこにもない。すぐにO.Kサインだ。

待ち合わせは18時にテルミニ駅。願ってもない面白い展開となった。彼女たちは大学4年生で

、同じ年。広島に大学に通っている。広島か…遠い！ まあ、そんなことは、どうでもいい。

サングレコリオ通りをまっすぐに行き、コロッセオが見えてきた。でかい。約45,000人収容で長軸188m、短軸156m、外壁高約51m。その横にあるコンスタンティヌス凱旋門が小さく見えるほどである。ちなみに高さは21m。コロッセオの内部に入ると、やはりコロッセオの内部であった。ここで剣闘士たちが闘ったかと思うとぞくぞくしてしまう。物理的な壮大さと時間的な深みと歴史的なロマンスに圧倒される続ける。

コロッセオの中段あたりの回廊を歩いていると、その時たまたま一人でいた神崎が数人の男に囲まれた。神崎もはじめは、腰が引けたが、相手の言っていることが写真を撮ってくれということだと分かると、神崎も笑顔となり相手も笑顔になった。

コロッセオから道幅の広いフォリ・インペリアリ通りを抜け、ヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂の前まで出て、昨日、写真の撮れなかったフォロ・ロマーナを見下ろせる丘へ行った。その後は、ヴェネチア広場を通り抜け、クィリナーレの丘へ出て、トレビの泉を見たあと、ホテルに戻った。ホテルで1時間ほど休息をとった。

テルミニ駅に5分ほど遅れて到着した。カラカラ浴場で待ち合わせをした女の子が待っている。昨日食べた僕らのお気に入りのレストランに行こうと思っていたが、今日は休業日であった。食事は、出たところ勝負で計画していた男二人は、よいレストランなど知る由もない。レストラン選びは、彼女たちに任せ、彼女たちが行ってみたいレストランがあったので、そこへ行くことにした。

地図を見て調べるのだが分からない。僕とよく話していた小峰さんは道を訊くことに躊躇なかった。

「ドゥーヴェ？ ドゥーヴェ？」

道行くイタリア人に憚ることもなく尋ねた。

本当は自分が訊かないといけないと思いつつも、彼女の度胸に甘えることにした。数人に訊いても明快な回答はなく、おそらく近くに来ているだろうが、その店にとうとう辿り着けず、結局、周辺の感じのいいレストランに入ることに決めた。僕はラザニアとビーフシチューとサラダのコースを頼んだ。

その店で、はじめて二人の名前を訊いた。小峰さんと豊田さんであった。小峰さんと僕は話があった。あわせているわけではないが共通点が多く、話していて面白かった。神崎と豊田さんもよくあっているようで、なかなかよい感じであった。彼女たちは、明日フィレンツェへ行くことになっていた。僕らはも同じフィレンツェであったが、ツアーで新幹線のチケットを購入済であったので、別々で行くことになってしまった。彼女たちをホテルまで送り、また、フィレンツェで会えたらいいね、ということを書いて分かれた。

2月12日 4つ星ホテル

ローマからのフィレンツェまでの新幹線は快適であった。車窓はローマ郊外の美しい田園風景を映し出していた。どこをとっても絵になる。途中、真昼だというのに、深いスモッグに包まれた。

フィレンツェに着くと、どんよりと曇っていた。到着したのが12時であったが、ホテルを探すのに少し時間がかかったが、13時過ぎには到着した。中規模のヨーロッパ調の建物で、驚くほど綺麗なホテルであった。ローマのリージェンシーホテルも同じ4つ星であったが、こちらのホテルの趣味の方が好みであった。ホテルでしばらく休み14時からフィレンツェを散策することにした。

日記はここまでで終わりであった。その後はメモが書かれてあるだけで、文章になっていないが、詩が残されていた。頭の中の引き出しの鍵は開けられていた。

暖炉の火は燃えている

今はあたたかい

暖炉の椅子はゆれている

天使は記憶をなくしてしまったけれども

鮮やかな空は濃密な森を思い出す

氷の中に貼り付けられていた未来は

さらさら溶けて どうにでもなるものに見えてきた

夢のような淡い気持ちがせまってくる

人は何者かになろうとしている

やっとみえたともしびに・・・

鮮やかなイタリア調の色調で彩り始めたこの世界に

大きな大きなキスを送り ぼくは安心して眠りはじめる

フィレンツェの屋根はオレンジ色をしていた

夕陽が暮れるのと同時に鐘はなる

少しの憂いと心のあつくなるような思いをからめて

パスタをブロッコリソースで仕上げる

露天の皮ベルトのおやじは酒のビン片手に大声でチャオとあいさつする

バルのウェイタの少年は親しげにいろいろと話しかけてくれた

カプチーノをただ飲みし チャンピ広場の骨董屋でうもれかけてた太陽を買ってくる

クッキー屋の主人もパスタを売っていた小売店のじいさんもみんないい人だった

今はあたたかい

暖炉の椅子はゆれている

天使は記憶をなくしてしまったけれども

鮮やかな空は濃密な森を思い出す

氷の中に貼り付けられていた未来は

さらさら溶けて どうにでもなるものに見えてきた

夢のような淡い気持ちがせまってくる
人は何者かになろうとしている
やっとみえたともしびに・・・

ピンチョの丘でたむろする少年達は原チャをブーブーふかし
ピザ屋の女の子は目の大きいふくよかなイタリア女性だった
スパゲティミートソースはぴりがらく フランスパンはかたかった
ローマの夜景は暖炉の残り火のように闇の中に灯り
人々はなごやかに談笑し タベの楽しいひと時を送る

今はあたたかい
暖炉の椅子はゆれている
天使は記憶をなくしてしまったけれども
鮮やかな空は濃密な森を思い出す
氷の中に貼り付けられていた未来は
さらさら溶けて どうにでもなるものに見えてきた
夢のような淡い気持ちがせまってくる
人は何者かになろうとしている
やっとみえたともしびに・・・



純一は、日記帳をぱらぱらとめくりながら、感慨に浸っていた。やっとみえたともしびに・・・
その当時何が見えたのであろうか。なんとなく思い出す。そして、今もまた何か見えてきそうな気がする。前向きに歩けそうな気がしている。

日記については、今、書けば、違うものになるだろうと率直に感じていた。別の視点から観察しているかもしれない。まさか、無感動という事態にはならないだろうかと少し心配にもなる。いや、そんなことはないだろう。

人間は何を記憶しているのだろうか。この旅行記を読んでも、純一は何も覚えていないに等しかった。まるで記憶喪失かのようにであった。通りの名前から、そこで会った人々まで忘れてしまっていた。詩的な情景は、心に焼きつき、その風景は永遠のように心の中にあるものだが、どこで何をしたかなど、脳の奥底に監禁されてしまっている。そんな情報が、脳には無数に溢れている。無数の言葉にならない感覚や経験、物語が大きな海のように広がっている。拾い出せない記憶が泳ぎ回っているようなそんな感覚に襲われる。記憶喪失の流れ・・・次は何の景色が脳裡をよぎるのか？

記憶の海に溺れることにしよう。それがなによりの冒険となる。昔、伯母が言っていた。「私らの年代になったら、あの時の記憶はいつのやったか。もう、記憶がごちゃごちゃになって分か

らんようになる」記憶は身体から切り離され、勝手に浮遊し始める。

記憶は操作不能となり、神出鬼没に現れては消え、消えては現れる。記憶の海の底に大切に放置されている。拾いにいかなければ、どこかへいってしまう。消えないように、文字に焼付けることが必要だ。迷子になんかさせない。現れては消え、消えては現れる。景色、記憶、残像、香り。詩はね。忘れて、忘れて、忘れたところに、浮き上がってくるもので、下手に記憶がよすぎてはよくない。そぎ落として、そぎ落としたところに残ったエキスが詩になる。

純一は、記憶の引き出しの鍵を作ろうとしている。妻は、既に日々いつもいる永遠のものであるが、その過去が純一を怒りや後悔、無力感という中毒症状にさらす。その過去と決別すると同時に、その過去をも永遠とするためには、鍵を作る必要があるのだと。

切除するためには、紙に振り落とさなければならない。書くことにより心は浄化され、復活は約束されたものになる。

切除手術をしなければ、永遠に悲しみは癒されないだろう。大傷を負ったまま、どこへも行けずに人生半ばで行き場を失う。妻の記憶とどう向き合えばよいのか。切除手術は、純一にとって大きな苦痛を伴うのは間違いない。けれども、いずれ立ち向かわなければならないことだ。

今のままでは、記憶の大海原に漂流されたままになる。脳は防衛反応で、さらに隠そうとするだろう。けれども、純一はその引き出しの鍵だけは持っておきたかった。いつでもその時に帰ることができるように、あの時の妻に会えるように、鍵を持っておきたかった。

妻はある時、こんな話をしてくれた。妻が高校生だった頃の話だ。プロテスタントの教会の夏休みの中高生合宿のことである。

「純一、私、ずっと気にかかっていることがあるの。ずっと前の話。高校生の頃。教会の合宿に友達を誘ったのよ」とゆっくりとした口調で話し始めた。

「うん」

「仲のよい友達だった。絶対に来たほうが楽しいと言って誘ったのよ。そのころの男女って、みんなでわいわいとしながら、夜も寝ないで遊ぶことも多いわよね。よくあるみたいに、合宿に参加した男女数名で、夜バイクで山へ行こうという話になったの。私も誘われたけど、そういうの嫌いだったから行かなかったの。でも、私が誘った亜紀はみんなと遊びにいっちゃったのよ。男が運転して、女の子は後ろにのって、わいわい言って山道を登ると言って」

「それで」

「私は残った友達と、たわいもない話をして、そのまま寝たの。そして、朝起きたら、もうみんな押し黙り変な雰囲気だった。そうしたら亜紀は交通事故にあって死んでしまったということを知らされた。もう、私は訳が分からなくて、えって言う感じで、固まってしまって、ずっと話せなくなってしまって放心状態が続いた」

「大変なことだ」

「もう訳が分からなくて、昨日まで生きていた亜紀が、その瞬間いないということが信じられなかった」

「どんな事故だった？」

「山道ではなくって、普通の平地の直線道なんだけど、どう言う訳か道路が一部陥没していて、そのままその穴で転倒して、スピードもかなり出していたようでほぼ即死状態だったみたい。その後、両親が来られて、泣いて泣いてものすごく悲しみに暮れていた。両親に私がこの合宿に誘ったとは言えなかった」

「別にいう必要はないよ」

「でも、私が誘わなかったら、亜紀は死ななかつたでしょう」

「ああ、死ななかつたかもしれない。けれども、この合宿に来たとしても、夜友達とバイクに乗って遊びに行かなかつたら、死ななかつたよね。夜、遊びに行くという判断をしたのは彼女なんだから、愛莉は悪くない。それにこの合宿に来たのも彼女の意思でしょ」

「そうかな。そうよね。でも、私はずっとこのことが気に入っているの」

「愛莉は悪くない。そういうふうに考えないほうがいい」

「うん。そうね。分かった」

ずっと、気に入っていたことなんだろう。愛莉が、ある時寝る前に、ベットの上でこの話をしてくれた。この話は、3度も聞いたように記憶している。それだけ、心の中で滞留していたことだったのであろう。

そして、また愛莉はこんな話もしていた。迷子になった犬の話である。

「今日ね。街を歩いていると、エリザベス・カラーをしているコッカー犬がいたのよ。どうしたのかなと思って、それに可愛かつたし、近寄って撫でたりしていたら、首輪に連絡先が書いてあったのを見つけたの。そのとき、たまたま友人の大園さんと一緒にいたから、どうしようかと一緒に考えたの」

「エリザベス・カラーをしていたっていうことは、どういうこと？」

「分からないけど、していたのよ。顔に傷があつて、搔かないようにするためとかだと思うけど」

「コッカー可愛いよな。動きに落ち着きがなくて、見ているだけで笑えてくる」

「そう。可愛い。それできっと迷子だから、連絡先に電話してみようということになって、連絡したら、そうすると、先方に『私も知り合いからそのワンチャンを預かつていて、勝手に逃げてしまった。知り合いにも連絡が取れなくなつてしまったので、保健所へ連れて行ってくれ』と言われた」

「なにそれ、意味わかんない」

「私も、えっと思って、状況がよく分からなくなつて、分かりましたと言って電話を切つて、でも、大園さんと話し合つて、それでも意味不明なので、もう一度、電話をして、引き取つてもらえますかと言つたところ、それはできませんと言いつられて、そのまま電話を切られた」

「その人、嘘ついているんじゃないの？ 本当は犬を捨てたかつたんじゃないの？」

「じゃあ、なんで、首輪に連絡先が書いてあるのよ」

「意味不明だな」

「それから、大園さんと話し合つて、保健所へ連れて行くと殺されるだけだから、大園さんが知

っているペットショップへ連れて行ったら、その店では犬の里親探しをしてくれるので、そのまま、そこに預けて来たの」

「そうか。よくやったね」

「すっごく可愛いコッカーだったから、そのまま、飼いたいくらいだったわよ」

「飼うのはダメだ！」

また、愛莉とこんな話もした。ふつふつと思い出される。喫茶店の店じまい前にゲットしたカーテンの話である。

「じゃん！ バラ柄のイングリッシュ風カーテンもらってきちゃった！」

「えっ！ どこで？」

「家の近くの喫茶店。大正ロマン風のお店があったでしょ」

「あったけど、そこはつぶれるって言っていたよね」

「そうよ。つぶれるのを待っていたの」

「あまり、いい待ち方じゃないなあ」

「そう。私。あそこにあったカーテンが気に入って、店長さんに訊いたの。このカーテンはどこで購入したんですかって。そうしたら微笑みながら『ニトリですよ。うちも経費削減しないといけないから、なるべくコストをかけないようにと思って』と教えてくれた。私はニトリへ行って、同じ柄のカーテンを探したら、既に製造中止の製品で、でも、あの柄がどうしてもほしくて、在庫をすべて探してもらったんだけど、それでもなかった。だから、あの喫茶店のカーテンをずっとねらっていたの」

「それで、ねらっていたのか」

「それが、友人とお昼のお茶をしに行ったときに、ちょうど夏に店じまいするって、言われたときにぴんときた。これは、もらうしかないって。だから、そのときに予約して、もらう約束をしたのよ」

「すごいね。その執念！」

「夏で店じまいすると思ったら、秋口までやってるの。っっ！ 待ったわ」

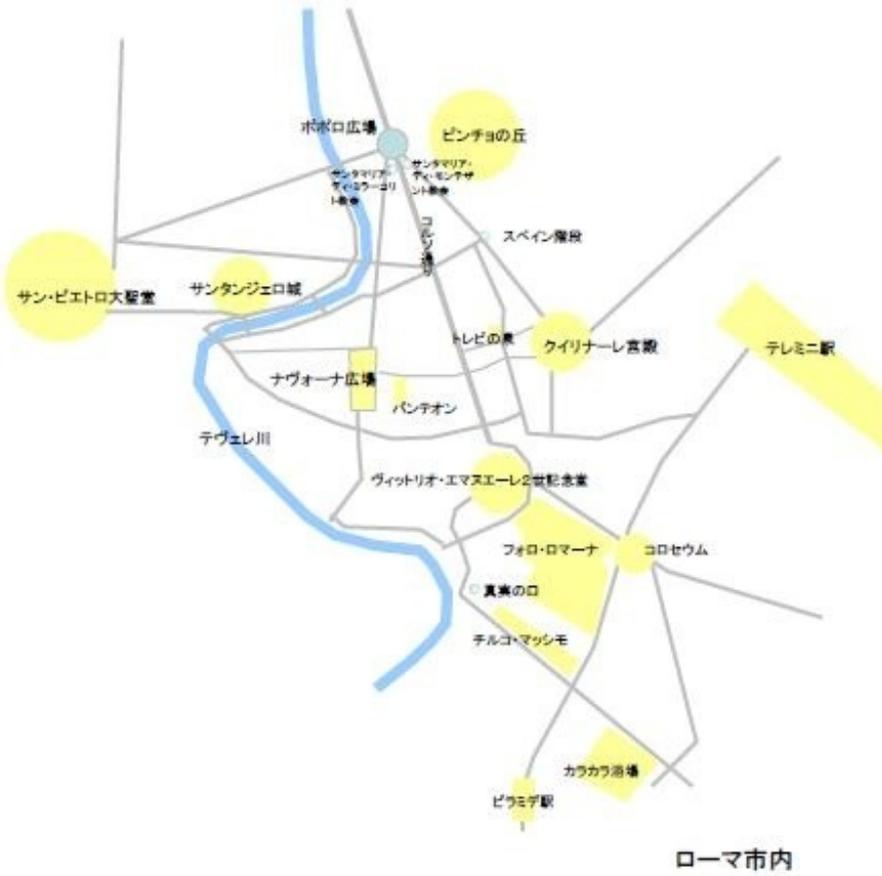
「おそろしい。で、今日、もらって来たのか」

「そうよ。いいでしょ。この柄！ 私が思っていたとおり！」

「こだわり勝ちだね」

愛莉といると楽しかった。思い出すだけでも、幸せな気持ちになる。ぼんやりと、夢うつつな気分のまま、風呂に入った。風呂に入ると、心地よさゆえにさらに夢見心地となった。愛莉の記憶が自分の記憶でもあるように思えた。風呂から上がると、生まれ変わったようにすっきりとした気持ちになる。そして、その日はそのまま、床に入り寝た。

map - ローマ市内



5. 東北の星々の輝きは瞬く

純一は、妻の遺品を衝動的に手にとってみたいとなった。整理した遺品は箱の中に片付けてある。押入れの中からその箱をあけ、携帯、財布、眼鏡を取り出す。その時の空気に一瞬、舞い戻り、引き込まれそうになったが、その箱の蓋を閉じた。

物には、その物があつた時や場所や空気を克明に想起させる不思議な力がある。その時の空気感のようなものを走馬灯のように一瞬で晒し、衝撃的に現す。匂いや感触や、淡い苦い感情や、愛していたという胸苦しい思い、携帯、財布、眼鏡にまつわる数々の思い出、そして、妻の心の動きまでも生々しく現す。失われたものが、突如として一瞬のうちにその時に帰れたかのようなリアル感覚で、浮かび上がる。突然の衝撃にひるみ涙が溢れる。

純一は、その箱を押入れの奥のほうへしまった。そして、妻と関係のなかった昔のことを、逃避するかのようにもっと思い出したくなった。昔の感動を思い出すことによって、今が、豊かな気持ちになるようであった。今が豊かになる秘訣が記憶の中に隠されている。21歳の純一に帰る。21才からもう戻れそうにない。

1995年8月3日 北茨城の海水浴場への誘惑

我孫子駅5時40分発、平（たいら）行きに乗り込む。ホームの先端で待っていたが、列車は短く、中寄りで止まってしまい、列車へと急いで駆け込んだ。列車の中で待っていた大澤も、なかなか僕が中へ入ってこなかったのも、心配になったという。僕も乗り遅れるかと思い、相当にドキドキした。

僕らの隣のほうで、女の子二人組がぺちゃくちゃと喋っていた。とても可愛く綺麗な娘達であった。僕らも二人で話しており、お互い意識していたようだ。ときどき目があつた。そんな彼女達は、日立駅で降りてしまった。海水浴に行くようだ。僕らも彼女達のあとを付いて行きたいくらいであった。北茨城の海はとても綺麗で、絶好の海水浴ポイントだと思う。朝5時40分に我孫子を出発して、7時30分頃には着くのだから、お金も掛けずに手軽に行ける海水浴場だ。

出発前日の夜は、子供のようにあれこれと、合宿のことを想像し興奮して、ほとんど寝られなかった。そのため、青森までの電車の中では、ほとんど居眠りをしてた。ただ、ぼーっとして車窓から外の景色を眺めていた。

青森駅では、去年の北海道合宿と同様に、駅寝をした。去年は涼しくて、とても寝やすかったが、今年は蒸し暑く、蚊もぶんぶん飛び回り、非常に寝にくかった。肌の露出している部分には、蚊よけスプレーをしっかりとかけ、また蚊取り線香をつけて、準備万端で寝に入ったが、暑かった。寝袋では暑い。3時くらいまで寝られなかった気がする。「今日は、電車の中で一日寝ていたから、しょうがないな」と思いながら、寝られぬ夜にまどろんでいた。

8月4日 スローモーションの映像

朝から、出発が遅れる。1年生の小島と野村が遅刻したのだ。そのため、出発は11時をすぎってしまった。松下も来なかったのも、3年生の木内さんは12時まで青森の駅で待っていた。出発し

ても休憩時間が長く、なかなか先に進まない。しかし、傘松峠まで一気に高度を上げた。青森海拔0mとすると、1,034mまで一気に駆け登ったことになる。その途中の雲谷というところで、事故に遭遇した。

雲谷の道端で休憩中に、そろそろ出発しようと思い、大澤と二人で道路脇に出て、しばらく、ぼんやりと立っていた。遠くのほうから自動車が向かって来ていた。僕らの前を通り過ぎずは自動車の、休憩している僕らの目の前の信号機に激突した。激突する瞬間はスローモーションの映像のように見えた。ごく当たり前のように柱にぶつかり、バンパーが折れ曲がり、なんらかの液体が入ったケースが割れて液体が零れ落ち、蒸気音がシューと言って白い煙が出る。爆発するのではないかと思ったが、そのようなことはなかった。

助手席に座っていた中年の女性はシートベルトを付けていなかったため、フロントガラスに頭を突っ込んでしまった。その女性は一番重症で、鼻から出血しており、ムチ打ちで全身動きがとれず、肩あたりを動かすと、のけぞり痛がっていた。事故現場は、某大学前であり、その関係者も衝突音を聞いて道路に出てきた。彼らは、僕らのサイクリング同好会の一列に車が飛び込んだのかと思ったらしく、慌てて駆け寄ってきたのだと言う。119番へは僕が連絡をして、その7、8分後に救急車のサイレンが聞こえてきた。

また、後続で走っていた西尾と小早川は、誰かが事故にあったのかと思い、非常に心配しながら、上り坂を登ってきたとのことであった。小早川の自転車がパンクをして、それを西尾が直しているうちに遅れをとったとのことであった。

事故の原因は、居眠りのようであった。大澤は自動車が通り過ぎたところから1.5m程度しか離れていないところに立っており、僕は3mほどのところに立っていた。もしかしたら、事故に巻き込まれていたかもしれない。そう考えたら、非常に恐ろしくなってくる。某大学の事務員の話によると、前もこの地点で事故があったらしく、そのときには、ちょうど、大澤が立っていたあたりから、僕の立っていたあたりへと突っ込んできたという。ゆるやかなカーブとなっているところで、事故が起きやすいポイントだという説明であった。考えただけでも、恐ろしい。その後、集まった人々に、これから先、ひどく曲がりくねった急坂になるから、十分注意していきなさいと言われ、その事故現場をあとにした。



純一の脳や身体に電氣的信号が悲しいほど走り回った。脳の前頭連合野では一群のニューロンの持続的発火が起こり、過去の記憶や感覚が引き出され、シナプスは活発に交換し、唐突に表面に躍り出る。即座に逃避しようと体は反応する。イメージの関連付けや統合等の情報処理が活発に行われる。事故のことは、思い出したくなかった。身体はこわばり、呼吸も荒くなる。愛莉の命を奪った交通事故のことが想起され、また、重苦しい気持ちとなった。純一と愛莉とを切り裂いた無機質の冷たい暴力的な塊は、二度と会えない隔たりを確実に築いている。そのことを感じたくはなかったし、思い出したくもなかった。

頭がしびれ思考が曇り、行き場をなくす。愛莉は事故の前日に純一のために3足1セットの靴

下を買ったが、純一はもう少し蒸れない質のよいものを買ってきてほしいと文句を言っていた。ショッピングモールでは、昼食と夕食の食材の他に、純一の靴下も買って帰るはずであった。ところが愛莉もなにもかも戻ることにはなかった。愛莉はどこへ行った？ 話しかけてもなにも返ってこない。むなしく自分の声ばかりが響く。何度も空に問いかけるが、声は空に消えるだけ。お願いだから何か答えてほしい！ ひとり取り残される。ただ、愛莉の姿は見えてしまう。

傘松峠からは、ずっと下り坂であり、ブナ林の中を爽快に駆け抜けていく。ブナ林の薄緑の葉々は、繊細に光を浴びて透き通り、木漏れ日がきらきらと輝く。確か自動車のコマーシャルに、こういった林道を駆け抜けるシーンがあったなと思った。

十和田湖温泉郷で休憩していたら、ようやく、青森で集合時間に遅れてきた大林、西と青村さんが追いついた。木内さんは大喜びであった。3年生だけあって、彼らを真剣に心配していたようであった。だいぶ、陽も暮れてきたこともあり、ここでキャンプをしようという案が出たが、明日がまたつらくなるということで、先を急ぎ奥入瀬ラインに行くことになった。

奥入瀬ラインに平行して奥入瀬川が流れている。風光明媚なところで神秘さえ感じられる。心も清められる渓谷を走り始めて30分ほどすると、周囲を見ることもできなくなってしまった。陽が暮れてしまったのだ。ほとんど真っ暗な道を、ただ、アップダウンを繰り返し、ひたすら自転車のペダルを漕ぐ。周囲の景色を見ることもなく、前に進むのみであった。ああ、残念だ。また、いつの日か来てみたい。

子ノ口につくと、藍色の闇と今にも同化しつつある十和田湖が見えてくる。大きな湖である。空と湖面の境界が分からない。到着したときには、御倉半島は見えたと、全員到着したころには、何も見えなくなってしまった。宇樽辺キャンプ場に着くと、完全な夜が訪れた。夕食は簡単にスパゲティを作って食べる。夜は涼しく快適に眠ることができた。

8月5日 発荷峠のイチゴ永・八幡平切留平キャンプ場の夜空

朝から骨の折れる登り坂であった。想定外の坂であったので、息もあがり、非常に身体に負担がかかった。瞰湖台で十和田湖を一望し、サイクリング同好会メンバー全員で写真を撮り、その次の発荷峠展望台でも十和田湖を一望した。発荷峠に売店があり、イチゴかき氷を売っていたが、「イチゴ永」と看板に書いてあり、メンバー全員で大笑いをした。

この2つの峠を越えると、しばらくは長い下り坂となる。この下り坂で1年生の中井が転倒して怪我をした。自転車の泥除けが前輪に食い込み、前輪がロックし前転したのだ。

怪我はかすり傷程度で大事に至ってないかに見えたが、あとで近くのリハビリ温泉病院へ行ったみたところ、骨にひびが入っていたことが分かった。転倒し後続の吉波が自転車を道路脇によけ、一緒に走っていた僕は傷口に消毒液のキズドライをかけた。その後、3年生の青川さんが追いつき、三人で前輪に泥除けが食い込んだ自転車を直しにかかった。

中井は、東京から青森まで自転車に乗って4日間で走破するくらい身体も強く、自転車経験も豊富であるのに転倒してしまった。きっと疲労していたのであろう。ただ、なぜ、泥除けが前輪に食い込んだのか原因は分からず、中井はずっといぶかしがっていた。下り坂の恐ろしさをまぎ

まざと見せつけられた感じがした。

リハビリ温泉病院近くで昼食をとる。僕は100円引き太巻き、グレープフルーツ、フランクフルト、メンチカツを買った。太巻きは量が多すぎて、なおかつ、ねちっと全体的に湿っており、口には合わなかったので途中で捨てた。

鹿角市へ抜けると、徐々に両脇から山が迫ってくる。東北らしい風景となってきた。西尾率いる1班は、スピードを速めて先へ先へと進み、後続の2班、3班はゆっくりと進んだ。そのうち、辺りは暗くなり始めかけてから、八幡平へ向かう道はアップダウンが激しくなってきた。

キャンプ場へ着く手前に温泉があるので入ることにした。温泉の湯を飲んだが、表現不能な奇妙な味がする。温泉に入り心地よくなり、このまま泊まりたい衝動に駆られたが、今日中にキャンプ場まで行かなければ行程が厳しくなる。留まりたい気持ちを抑えて、温泉をあとにした。キャンプ場に至る道は、まだまだ登り坂で、背中に汗をびっしりとかいたが、外気は涼しく、すぐに汗は冷やされ、背中も冷たくなった。満天の空には、きらきらまばゆいばかりに輝く星が一面に広がり、その下の僕らは目的地へと急いだ。夜道では、キャンプ場がなかなか見つからず、右往左往していたが、暗い中、慎重に標識を確認しつつ探すと、ひょっこりとキャンプ場が現れ、ほっとした。

静かな夜であった。夕食は、大きな鍋でカレーライスを作り、ご飯2合と併せて食べ満腹する。高原のキャンプ場の夜は肌寒いくらいで、完全な静寂と闇の中、夜空の星々の輝きを浴びつつ、心癒される小川のせせらぎに心を洗われていた。流れ星が3つ降り、乳白色の天の川が夜空を流れている。この合宿中、一番の美しい夜であった。

8月6日 熊の寄生虫・西尾のイカの親爺

小川のせせらぎ、小鳥の囀り、木内さんが大声で喋る声、大木の温泉がどうのこうのといっている話し声で目が覚めた。昨夜は小川のせせらぎを聞きながら寝たが、知らぬうちに夢の世界へと導かれていた。

八幡平切留平キャンプ場をあとにして、八幡平アスピーテラインを登る。背面はのけぞってしまいそうなくらいの急坂であった。入口あたりの傾斜角度に驚く。大澤と二人で、マイペースに登った。標高1,000m、1,100m、1,300mと上昇するが、頂上はまだか、まだかと、思いながら汗だくとなって自転車を漕いでいった。標高が高くなると風が冷たくなり汗が冷やされ心地よい。1,500mの標識が見え、しばらく登ると展望台があった。広大な景色が視界に広がる。写真を撮って見返峠へと急ぐ。峠の天候は5分おきに変わる。非常に暑い日差しが出てきたと思えば、急に雨が降りそうなくらい暗くなる。

八幡平の下り坂は、岩手山の眺めが素晴らしく、東北の雄大さを体で感じた。そして、本日の宿泊場所となる桃屋へと急いだ。

桃屋の主人は熊を飼っていた。家の中にも動物の剥製が飾ってあった。実際に主人は、玉山村の出身で、昔は熊狩などの狩猟をしていたらしい。

その桃屋の風呂に入ったときのことであるが、左脇腹に、ほくろ大のものが突出しているのを発見した。それに触れると、痛痒く、どうしようかと一瞬考え、取ってみようと思ひ引張ってみ

たが取れなかった。これは、ほくろがとび出たのかと思い凝視してみた。そうすると、なにやら動いているのである。黒いものから小さな細い足がゆらゆらと細かく動くのを見てしまったのである。これは取らんといけないと思い。すばやく小さな黒いものを強くつまみ、指先に力を集中させて引き抜いた。そして、それを熱湯につけ動きが止まったところで、それをつまみあげ壁に押し当てて、指先で潰した。ぷしゅっと、どす黒い赤色の液体がとび出てきた。につくき寄生虫め、と心の中にそう呟き、僕の心臓は高鳴っていた。

また風呂の中では、先輩のナベさんの色白説とひ弱説で、盛り上がっていた。家の中にいる時間よりも、外にいる時間のほうが長いといわれている色黒のナベさんのパンツをはいている部分が白かったのだ。

夕食はバーベキューであった。2つの鉄板と炭火焼用鉄網があり、僕らの鉄板は火力が弱く、ライトは電池切れとなり、焼けないは、暗いはで、最悪の事態であったが、隣の西尾担当の鉄板と、木内さん担当の炭火焼用鉄網は、明るいライトに照らされて火力も強く、じゅうじゅうと焼肉を焼いていた。僕らはそれらをうらやましく見ている役であった。木内さんは焼肉屋の親爺となり、西尾はイカの親爺となり、猛烈にじゅうじゅうと焼き、うまそうな匂いを放ちながら、職人さらながらの手つきで顔つきで、楽しげに鉄板を取り仕切り、また鉄網を使いこなしていた。

8月7日 岩洞湖湖畔での爽快な走り

大澤が、前輪の荷台に積んでいた後輪の泥除けを前輪に挟みこんでしまい、平地で転倒する。前輪のアウトアーギアが割れ、ホイールはへこみ、さんざんな状態となった。盛岡市内の自転車屋で修理し、通常に走れるようにはなったものの、前輪のアウトアーギアは割れたままの状態である。それでも、盛岡市内では名物の冷麺を食べた。

岩洞湖湖畔の道路で、3班だった僕の班は、先輩の青川さんの、ぬかせ、ぬかせの合図で、2班、1班をごぼう抜きにした。前から、休憩時間が長くだらけ気味だったので、爽快に走り抜けるのは気分がよい。走りすぎたのか、この日は非常に疲れた。

8月8日 龍泉洞と星降る夜

国道455号は東北の雄大な自然の中を走りぬける素晴らしい道であった。早坂峠を過ぎると、下り坂が続ぎ、高原の心地よい木々の間を自転車は疾走する。ほどなくすると龍泉洞に着く。龍泉洞には地底湖があり、その湖水はおそろしいほど透き通っている。光を当てられた湖水を見ると、波紋が深くまで伝わり、深い闇へ消えてゆくのがわかる。地底湖がどこまで続いているのかは、未だ明らかにされていないという。説明には透明度は41.5mで、世界一と書いてあった。洞窟内は涼しく17.5℃であり、外気温は28.7℃なので、内外の温度差は10℃ほどある。地底湖の水温は10℃と表示されていた。洞窟内は肌寒い。洞窟の外へ出ると、眼鏡が曇った。

その夜に宿泊したキャンプ場では、シチューを作り食べた。巨大な流れ星が鮮明に光り、その軌跡には星屑が舞う。星降る夜の感動的な天体ショーであった。



純一はコーヒーを飲みながら、愛莉の好きだったバラ柄の一人掛けソファに座りながらに日記帳を読み続けていた。こうして記録しておけば、あとになってもそのときの景色がよみがえる。しかし、純一は愛莉との記憶の記録について考えたとき、不安と困難さを感じつつあった。今の純一にとって鍵の製作は難しいのではないかと。鍵の製作には、記憶を切除し、紙にふるい落とさなければならない。切除して表に出てきたときには、そのまま帰ることができない気がする。相当な勇気が必要であるし、途中で力尽きるかもしれない。

今までは、そのつらさのため、そのときのことをあまり考えないように、気を紛らわしたり、別のことに打ち込んでみたりしていた。事実、今、ここにいるのは、仕事をしたり、酒を飲んだり、脳を麻痺させて、妻の死のことを思いつめ慟哭で支配された真っ暗闇の時間に自分を浸さなかったからである。ある意味、その思いから遠ざけたから今がある。

今のまま、遠ざけたまま、時が流れれば、常に頭にあることでも、次第に、16年前の記憶と同じように、その細部は、自然に消えていってしまうのではないかと不安にかられる。

だからこそ、記録を残しておきたいと思う。妻のことを、安心して心の片隅に置けるように、すべての整理がとりあえず終わったこの時期に、妻との思い出を整理したいと思う。

それが前に進むために必要なことだと考えている。その一部始終を記録として残しておきたかった。成功させなければいけないことは強く感じている。それが乗り越えることだと思われた。

鍵を作るために、妻の残した手紙やメールや書き物を集めてみる。今までは、中身は見ずに、見ても見ぬ振りするくらいであった。整理をして箱に入れたり、ファイルに綴じたり、いろいろな箇所に愛莉のものが分散していた。それを集めようと思い、まず、ファイルに綴じた手紙を手に取り、目を通した。

見始めたときに、もう、すべてが了解された。ムリだと。読めば、その時の情景が広がり、生々しく身に迫り、記憶は回転し涙が止まらなくなる。そのときの怒りや後悔、無力感が押し寄せる。もう、よい。急ぎすぎだ。鍵はそのまま記憶の大海原へ捨てよう。整理をしようと思っただがムリであった。乗り越えるなんて、格好をつけすぎだ。一発でだめだ。鍵なんて、もともと必要もない。困難に立ち向かう英雄を気取るのはやめよう。記憶は、大海原の底に沈めておくのがいい。ムリをしてはいけない。時間が解決するはずだ。十年単位の時間を要するかもしれないが、その時が来るのを待つがいい。そう思った。

37才から20才を振り返る。20才の純一は、今の純一ではない。細胞も何もかも違う。けれども、記憶だけは受け継がれている。10才の純一は27才の純一を思い浮かべることはできなかった。そして20才の純一は、37才の純一を想像だにしなかった。47才の純一は、今の37才の純一をどう見るだろうか。どう記憶することになるのだろうか。よくやったといってくれるのであろうか。よく耐えたというだろうか。そもそも、お前が決断しないから、もしくは行動を起こさないから、恵まれない環境を耐えなければならないと訴えられるのだろうか。そして、37才の純一は47才の純一を思い浮かべることはできない。

ふとしたときに、生々しく思い出されるときが辛い。残影が感じられるとき、なんとも言えないくらい感情に襲われる。記憶の底の实在と結ばれる。

切除はもう、いい。昔のように旅をしよう。冒険をしよう。それだけだ。妻のいなくなったあとの時間を、なにか新たな感動で埋め尽くさなければ、純一は、ずっとこのまま同じ状態が続いてしまう。新鮮な記憶で彩ろう。旅のように、冒険のように、新たに世界を塗り替える。大事なものは、記憶の海の中に沈めたままにして。

遠くの親戚が言っていたことを思い出す。葬儀が終わって半月も経たないときのことである。「奥さんのことは、心の片隅において、自分の人生を歩きなさい」と。純一は、そのときは、なんてことを言う人なのかと悲しみながらも憤慨しそうになった。けれども、前向きな大事な言葉として記憶に残っている。妻の写真や遺品はたくさん残している。記憶は海の底にある。いつか、整理できるときがきたら、その時に整理すればいい。今は記憶の海の底に、ずっと沈めておこう。自然に回復するのを待つしかないのか。回復？ きっとないだろう。このまま、ひとりでも構わない。できれば、そうさせてほしい気もする。

けれども、生きているならばこそ、もう一度、冒険をしてみたい気がする。新しいものになりたい。この脳を新しいものに変えることができるのだろうかと思う。

ビデオの中の祖母はこういていた。「人間長いこと生きていたら、2つや3つ、罪を償いたいことなんて、当然あるもんや」そのときの祖母は、20年前だ。髪の毛も黒く、楽しそうに、親戚みんなと話している。親族一同で温泉旅館へ泊まったときの映像が流れている。ビデオの中の20年前の祖母に慰められる。今の祖母は80歳を過ぎ、特別養護老人ホームにいる。痴呆も進んでいる。

思い出すと連鎖的に、いろいろなことが想起されてくる。純一の友人は、昔、10代のころ「30まで生きたら、もう充分だ。死んでもいい。そこまで、生きたら、もう、俺の中では、やることはない」と言っていた。最近、会って、そんなことを話していたなと言うと、「今は、次の目標は60までだな。ちょうど、娘が成人している頃だな」と言っていた。

人間は未来を見ることはできない。けれども未来を計画することができる。大学のときの教授は、こう言っていた。「私は、若いときに人生設計を立てて、35歳までに何をする。40歳までに、こうなっている。50歳までには、これを成し遂げる、といった計画を緻密に立てて、それと比較しながら、今まで来たんだよ。だいたい、その通りに行っている。いや、ちょっとだけ微妙に違うかな」

未来を思い描ける人もいれば、思い描けない人もいる。夢を見ることができる人もいれば、夢を持つことができない人もいる。例え、持ったとしても、そのとおりにいくことは、なかなかない。すべては、時の流れや運や使命が握っている。誰にも伺い知れない。

8月9日 455号線の心地よいラン

合宿最終日。今日の旅程は短いので、ゆっくりと、よい景色の場所があれば、自転車からおり、立ち止まり写真撮影などを行った。国道455号は素晴らしい。

海岸線沿いに出ると、リヤス式海岸なので、海にせり出す陸地を横断する道路は、アップダウンの激しい道となる。海岸線沿いの道から見る海は美しかった。

田老町で昼食をとる。ラーメンショップで南蛮ラーメンを食べた。学生割引で450円とお得であった。田老町で解散しようかという案もであったが、やはり、その先の中の浜で解散することとなった。

女遊戸（おなっぺ）海水浴場は、他から砂を運び込んで作った人工の海水浴場だと思われる。砂浜には大きな石がたくさんあった。15時を過ぎていた。海水は冷たかった。

今年はもうすでに市民プールへ6回も行き、泳ぎの練習をしていたが、そんなに泳げるほうでもなかったの、足の着くところだけにとどめておいた。ただ、海の浮力はプールとは違い、泳ぎやすかった。大木は泳ぎが得意で、遠くのポールが立っているところまで泳いで行ってしまった。木内さんは、白熊のような飛び込みをみんなに披露して泳ぎを楽しんでいた。

その後、中の浜で合宿を解散した。その後の予定は、各自それぞれで、そのまま、自転車で旅行を続けるものもいれば、電車に乗って帰るものもいた。僕らは、今夜はキャンプ場に泊まることにした。夜は3,000円もする花火セットを近くの小売店で購入して、試してみたが、どれもこれも子供だましのようで、なんとなくしらけてしまった。夜のキャンプ場は、暑苦しく、また蚊が寄ってきて、何度も夜中に目が覚めた。

8月10日 江戸っ子のリヤス式海岸と魚屋のじいさん

朝、急遽、大船渡まで自転車で行こうということになった。大船渡まで行けば、快速電車一本で仙台駅まで行ける。

大船渡までの途中に浄土ヶ浜がある。浄土ヶ浜は風光明媚な景勝地である。浄土ヶ浜に行くと木内さんとばったり会った。僕ら西尾、大澤、1年生の中井、3年生の青川、そして僕の五人で大船渡まで行こうとすると、木内さんが「ここは景色が綺麗なぞ。ほら、あんな海が青いじゃないか。こんな景色を残していっちゃうのか。宮古で駅寝をして帰ったほうがいいぞ」と言って、何度も何度も大きな声で一緒に帰ろうと叫んでいた。木内さんは、宮古で駅寝をして、明日、朝5時10分の電車です帰る予定であった。

昼食は木内さんと別れ惜しかったため宮古まで行って、富士乃屋というところで食べた。イソ井やイソラーメンなどがあって海の幸を堪能する。青川さんのスタミナ丼大盛は、かなりのボリュームがあった。

午後になって宮古を出発した。海岸線沿いでは強風に煽られ、先頭は正面から風を受けつらかった。峠を越えて、山田湾沿の道で休憩をした。山田湾の周囲は山に囲まれており、湖のような内海であった。船越湾沿の道は海の眺めがよいが、アップダウンが激しく、息も上がったため、四十八坂展望台まで登り休憩をとる。浪板海岸、吉里吉里（キリキリ）海岸海水浴場は、立ち寄ってみたいところであったが先を急いだ。

大槌町前のトンネルを越えてからが、江戸っ子のリヤス式海岸の本領発揮となった。江戸っ子とは、苦しんで坂道を登り、標高をあげて、えっちらこっちらと自転車で進むのだが、すぐに快感な下り坂で一気に海拔まで戻ってしまう。そんなことを繰り返すのだ。坂を上るのが貯金、下

るのは「宵越しの金は持たない」という行為。まったく、江戸っ子だ。これは西尾が言い始めたことである。

釜石市で夕食を調達した。釜石市内の公園で、西尾が水浴びをしようと噴水に突入して、霧の中へ消えて行ったと思うと、金属とアスファルトがこすれるようなガチャンという大きな音が聞こえた。なにが起こったのか、はじめは理解ができなかった。その後、霧の中から足を引きずって血を流している西尾が出てきたのである。西尾は噴水の水でスリッパし転倒して弁慶の泣き所を打って血を流していた。

石塚トンネル前の坂や鋤台トンネル前の坂はつらく、上り下りを繰り返しているうちに陽が暮れてくる。まだ峠は2つも残っている。羅生（らせい）峠と大峠である。僕らは名前を聞いただけで焦りを感じた。峠前の雑貨屋で休憩した。ライトの電池が切れて、あわてたが、その雑貨屋は電池を売っていたのは幸運であった。

そうして、雑貨屋の前で腰を下ろして休んでいると、キュキュキュという音と共に、魚屋と書かれた普通トラックが僕らの目の前に止まった。中から麦藁帽子を被ったじいさんが出てきて「お前ら、どこから来た？」とどでかい声で訊かれた。

僕らはこの手の質問をよくされるが、どこからといっても、人それぞれだし、大学は千葉だけれども、青森から自転車に乗って来たので「青森」とも答えることができる。こんな思考で一瞬思案するのである。

そのときも同様に一瞬、間があったが「千葉です」と僕は答えた。

「千葉のどこだ。お前は」

「柏です」

「柏のどこだ」

「柏のどこって、柏のこと分かるんですか？」

「いいから、言ってみい」

「柏の布施です」

「布施と言うと布施弁天か」

「布施弁天、知っているんですか？ 関東三大弁天の1つの布施弁天を」

なんとも偶然の出会いで、非常に驚く。こんな山の中の世界の外れに位置するようなところで、自分の住んでいるところを知っている人に出会うとは、世間は狭い。

話によると、そのじいさんは、65才で5年前、柏でビルを7億円で建てたところ、だまされて1億円で売る羽目になり、岩手に来たのだという。柏には20年間住んでいたらしい。

そのじいさんは、なかなかぴんぴんしており、じいさんと呼ぶには忍びないが、別れる際に「青春を楽しんでくれ！かっちゃんの言うことなんかきいちゃだめだぞ！」と言って笑いながら去っていった。

なかなか楽しいじいさんであった。そのじいさんは、やくざの育ての親だとも言っていた。やくざにいじめられたら岩手で、こんなじいさんに会ったといえ、大丈夫だとも言っていた。ところが、肝心の名前を訊くのを忘れてしまった。

そんな偶然の出会いが終わり、現実を目をやると、羅生峠と大峠が笑っていた。僕ら五人は、

ライトだけを頼りに一列になって行軍した。闇の中、夜空は綺麗だった。どこの街か分からぬ夜景も美しかった。そうして走っているうちに、羅生峠を乗り越し、新三陸トンネル前の休憩所に着いた。なんだか拍子抜けしてしまう。どんなにかきつい峠かと思ったら、さほどきつくない普通の登り坂であった。休憩所で買ってきた夕飯を食べたが、非常にうまかった。ごはんといわしの缶詰、その他みかんの缶詰。

大峠は通らずに実際、新三陸トンネルを通りショートカットできるようになっており、自動車だと楽に通抜けられる。新三陸トンネルは地図では原付通行禁止と書いてある。けれども、そんなことお構いなしに、自転車で一列になって下って行った。そのあとは、ずっと下りであった。

盛駅に着くと、それは盛駅もどきの駅であった。貨物専用の路線で、もう2、3年前から乗客車両は停まっていないとのことであった。たまたま、貨物車両が通り過ぎたので、安全確認にホームから出てきた駅員さんが教えてくれたのである。せっかく、記念写真まで撮って、到着を祝ったのに盛駅もどきの駅であった。

本当の盛駅に着いて、僕らは疲れてぐったりとうなだれた。このまま路端に寝転んで眠りたい心境であった。しばらく休憩して、商店街へ向かい自動販売機でビールを買い、到着の乾杯をした。テントを張ったが、中は暑く寝られなかった。でも、僕らの自転車合宿は終わった。もっと走っていたい気持ちと帰りたい気持ちが半分半分であった。今日は総計120kmのアップダウンを駆け抜けた！！

8月11日 すっぱい匂い

朝、起きると少し離れた駅前に、裸の男が倒れていたが、酔っ払いだろうと思って、僕らはほっといた。

5時に起床しテントを片付けて、昨日のうちにコンパクトに輪行した輪行袋に小さくたたんだテントを入れた。身体は汗と埃でぐちゃぐちゃで、すっぱい匂いを漂わせていたが、顔と歯だけは綺麗に洗った。

盛7時1分発、快速南三陸2号で、僕らは帰途へ向かった。西尾と中井は、まだ疲れの残った顔で、僕らを見送ってくれた。彼らは仙台まで江戸っ子のリヤス式海岸と付き合うのだ。頑張れよっ！ こうしてこの夏の東北自転車旅行は終わった。



面白い仲間に面白い出来事、面白い冒険に面白い出会い、すべてが最高の瞬間となる。記憶の金塊を掘り当てている。すっかり忘れていた遠い昔の記憶がまたよみがえる。もう、純一は、旅に出るしかないと思いついた。旅に出て、何かを見つけよう。旅に出て、何かに感動しよう。感動は、過去の感動を呼び覚まし連鎖する。そしてその記憶も、さらなる深みを増す。

記憶は混ざり合い、気まぐれに現れ、失ったものは復活し永遠のものとなる。自分が自分である由縁は記憶にあり、記憶は景色と共にある。記憶は失われず、繋がりを復元し、人を支配する。

記憶は詩や楽園や世界になる。

16年前の旅行の記録を読んで感じたのは、過去の細部を忘れたことが分かったことではない。過去の旅行での鮮やかな感動はよみがえる。すがすがしい気持ちとなる。過去の感動に慰められ解放される。妻と関係のない時間の出来事は、妻を思い出さない。

関係があれば、悲しみは滲む。不思議なことに、忘れてしまっていた出来事も、文字を辿れば、また再生される。あのときの感覚が戻ってくるのである。これは不思議なことのように思える。記憶の大海原に浮遊していたものが、また、自分の手元に戻ってきたような感覚になる。

その体験は、また自分を生き返らせる。自分に必要なのは、旅行で体験した感動である。新たな感動で埋め尽くすことが、また前に進むために必要なことだ考えるようになった。あのときの旅行と同じように、新鮮な感覚、感動を探しに、旅に出ることにした。それが自分を生かすために必要なことだと思えた。

map - 東北



6. 紅葉狩りへ行って見たものは？

純一は、温かなこの環境に身をずっと置きたかった。我孫子、柏という地域で生活して、ここから出たいとは思わなかった。近くには、手賀沼の自然がたたずみ、水際の景観が美しい。大正時代は志賀直哉や武者小路実篤らが居住したところでもあり歴史的文化的な土地柄でもある。利根川水域の豊かな田園地帯が広がり、関東三大弁天の1つである布施弁天があり、春は桜の名所となるあけぼのやま公園も目と鼻の先にある。

東京という刺激にかられ、喧騒と競争の激戦地へ向かうのもよいが、身の丈にあった生活圏の中で過ごすことのほうが、自然の摂理にあった生き方のような気がしてくる。少なくとも、今は、そう思う。遠くばかり目を向けるのではなく、周囲に目を向けるならば、素晴らしいものは見えてくる。

秋は深まりつつあった。一人で紅葉狩りに出かけてみようと考えた。できるだけ近くで簡単にいけるところで、素晴らしい紅葉を見ることができる場所をインターネットで検索してみたところ、茨城県北部の袋田の滝周辺の山々の紅葉を探し当てた。

そこであるなら、常磐線一本で高萩駅までゆき、紅葉周遊バスに乗って、山々を回れば充分、日帰りで紅葉狩りができる。純一は茨城県北部への一人旅をすることに決めた。

充分に下調べをして、旅の計画を立てた。早朝5時半に出発し、高萩から花貫溪谷、袋田の滝、竜神大吊橋を回って、常陸太田駅からJRで我孫子駅まで夕方6時までには家へ戻る計画とした。これでも、花貫溪谷1時間、袋田の滝2時間弱、竜神大吊橋1時間とテンポよく観光スポットを回るものである。

平日は、仕事で朝から晩まで働き通しで、たまの土曜日は、だらだらとすごしているため、早朝起きて出発することに多少の不安はあったが、今回ばかりは、何が何でも目を覚まして行こうという気持ちでいた。眠たければ、電車やバスで寝ていればいいのだから、いつもと変わらぬ休日にもなり、また、自然に触れることによりリフレッシュにもなる。

前日の金曜日は帰宅が0時過ぎとなってしまったが、早朝出発することに変わりはない。目覚ましを5時15分にセットして、当日朝を迎えることにした。

純一は父に自動車带我孫子駅まで送ってもらい、常磐線水戸行き5時42分発の普通列車を待っていた。駅のホームで空を見上げたが、夜明けには早くあたりは暗い。吐く息は白く、まだまだ眠い。駅のホームでスイカを使ってグリーン車の登録を済ませた。しばらくすると、普通列車がホームへ入ってくる。早朝だというのに、まばらに人が乗車している。グリーン車は2階建て車両で、純一はその2階へ乗り込んだ。座席に座ると、目を閉じた。とにかく眠たかった。1週間の仕事の疲れを解消するために、睡眠の続きを始めた。途中、うつらうつらしながら目を覚ましたりするが、まだ外は真っ暗で人影がなく、照明だけがさびしく点灯していた。

茨城県に入り、どれくらい過ぎたのであろうか。ふと目が覚めると、あたりはうっすら明るく、遠くは霞みがかかり夜明けが近づいて、水色の風景が広がっていた。ああ、いい風景だなと思いつつも、また、まどろみに身を任せた。

次に目を覚ましたときは、朝日のまばゆさが目を刺激していた。雲の間から太陽がにじむように現れ、大地に目覚めの合図を送っているかのようであった。純一は、列車に乗っている間ずっととうとうとし、しびれるような快感を感じつつ、眠りの世界とこっちの世界を行き来していた。

車内アナウンスが流れ、次は終点の水戸駅であった。水戸駅には6時58分に到着し、7時2分発の高萩行きの列車に乗り込んだ。またしばらく睡眠をとって脳みそを休めていた。1週間使いすぎた。いつまでも眠ることができる。まだまだ眠り足りないと思いつつ、よだれをたらしていた。

高萩駅には7時48分に到着した。駅を降りると、簡素な小さい白い駅舎があるだけであった。広い鉄道敷きがあったが、その割には駅前に何も無い。まだ、町は動き始めていない様子であったが、空は青く気持ちよく晴れ渡っていた。改札を出ると、正面に立て看板があり「秋の巡回バス乗り口 左」とあったので、左に向かうと小さなバスターミナルがあった。バスターミナルには、何も表示がなく、どこが乗り口か皆目分からなかった。

もう一度、駅にもどり売店のおばちゃんに巡回バスの乗り場を聞くと、やっぱり左だという。まだバスの出発が9時で時間が早いから係の人も誰も出ていないんだと理解して、しばらく待合所で時間が来るまで待つことにした。ついでに売店でサンドイッチとおにぎりを買って、待合所で朝食を食べた。

左前のベンチに、中年の夫婦が座った。その話を聞いていると、その夫婦の親戚の新しいもの好きの誰かが電気自動車を買ったと言う。けれども、電気自動車は通常の自動車と比較すると音がほとんどないので怖い、そんな話であった。小型の電気自動車を買ったのだが、まだまだ金額が高い、あんなのはおもちゃみたいなものだけど、あれがこれから主流となるのかねえ、と話していた。

改札口のほうを見ると、部活動をしに行くジャージ姿の学生が多く行きかっていた。しばらくすると、年配の夫婦、子供が二人いる家族が待合所に入ってきた。彼らも、紅葉狩りをするために来ているようであった。

8時20分となったので、小さなバスターミナルの方へ向かった。小さなバスターミナルには、人が集まって来ていた。これは遅れをとってはまずいと思い、足早に小さなバスターミナルへ向かった。純一が行くと、ちょうどタイミングよくバスが入って来て、係の人が、秋の巡回バスにご乗車の方は、ここにお並びください、と言って集まってくる人々を整列させていた。列に並んでいる人は年配夫婦が多かった。後ろの夫婦は楽しそうに話していた。少し訛りがあった。

「どこに座るのがいいかな。前のほうがいいっぺ。いや、歌を歌わされっかもよ。バスに乗ったら、そら、歌を歌ってください、それでは前から願いますってね、言われるかもしんない。いや、後ろからかもしんない。やっぱり、座るなら真ん中がいいっぺ」

「バカだね。あんた。団体バスじゃないんだから。本当にバカだよ」

「いいや、わかんねえよお」

純一は、笑うのをこらえながら横で聞いていた。時間となり、バスへ順序良く乗り込んでいった。純一は前の方の席へ座り込んだ。22歳か23歳くらいの若いバスガイドが最後に乗り込んだ。小悪魔的な可愛いバスガイドであった。バスは淡白に発車した。

「はい。みなさん、こんにちは。私はガイドを担当させていただきます。小柳といいます。今回のバスは、秋の巡回バス初日の一番バスと言うわけで、私も今年初めてのガイドとなります。少し緊張しておりますが、どうかよろしく願いいたします」

拍手がぱちぱちぱちと沸き起こった。元気のよいバスガイドでバスの中も活気が出てきた。バスも順調に街中を通り過ぎ、山のほうへ向かっている。

「みなさまも紅葉を楽しみにしてらっしゃるかと思いますが、今年の紅葉も、ちょうどよい時期に来ております。この田舎町も紅葉の時期だけは渋滞。ほんとにこの時期だけです。今の時期だけが、一番賑わっています。だんだんと、山の中に入ってきました。この上に見えますのが、常磐高速です。これをくぐった先が山の中。ここまでが海側の街です。ここからが山に入っていくところです。田舎ですねえ～。もう少し進むと、紅葉が綺麗に見えてきます。私は、この町出身なんです。いいところですよ～」

次第に山道となり、ワインディングロードが続いた。山深くなってくると紅葉の密度も高まってきた。

「紅葉が美しくなる条件を知ってますか？ 1つが湿度です。これは水辺の木々の紅葉が美しいことから分かります。2つ目に夏場に太陽によく当たること。そして3つ目に寒暖差が大きいことです。今年は、夏場暑かったですね。太陽によく当たったかと思いますが、暑すぎて湿度が不十分だったようです。2年前の紅葉が最高に美しく、今年は、それよりかは少し劣るようですが、でも、例年に比べればよいようです。みなさんは、何色の紅葉が好きですか？ 赤ですか、黄色ですか？ 黄色の人？ いませんね。赤の人？ 何人かいらっしゃる。何色が好きかで、その人が何を一番大事としているかが分かるんです。赤の紅葉が好きな人は、愛を大切にします。よかったですね。次に、黄色の紅葉が好きな人は、お金が一番大事だと思っている人です。よかったですね。誰も手をあげなくて。もし、あげていたら、周りから冷たい視線をあびるところでしたね」

バスの中で笑いがどっと沸いた。純一は、睡魔にまた襲われていたが、可愛いバスガイドの話面白おかしく聞いていた。

「日本三大ブスの1つに茨城県の女性が上げられていますが、ご存知ですか。なぜ、そうなったかといいますと、昔、このあたりを治めていた佐竹のお殿様が、ある時、秋田県へ国替えとなったときに、国中の美人を連れて秋田へ行ったそうなんです。だから、残ったこのあたりの人は、ブスばかりになってしまって、美人ばかりだった秋田県では、秋田美人なんて呼ばれているんです。秋田美人は、実は茨城県の女性だったんですね。だから、もともとは茨城県の女性は綺麗なんです。私も美人に見えないですか？」

また、どっと笑いが起こった。純一はガイドのボルテージが上がってきたなと思い愉快になってきた。

「左に、真っ赤に燃えるようなもみじが見えますね。あちらにも、こちらにも。癒されますねえ」山には燃えるような情熱がそこかしこに隠れている。山を抜けると、山間の平地となり水田が見えてきた。沿道には家屋が立ち並び、その奥には水田が開けている。

「このあたりのお米は美味しいことで有名です。ほんとに美味しいんです。このあたりに住んで

いる人は、魚沼産のお米を食べても、美味しいとは思わないってよく言うんです。お米が美味しいのは、この辺の気候が影響しているようです。このあたりは、見ての通り、何にもない田舎で、季節になれば、蛍が綺麗に普通に飛んでいるんです。外から来た人は、こんなの初めて見たとかよく言われますが、地元の方は、蛍を害虫扱いですよ。網戸にとまった蛍は、ばちんと叩いて撃退してしまうんですからね。でも、ほんとに自然がいっぱいです。いいところですよ。すばらしいところですよ。みなさんも、機会があったらその季節にまた、来てみてください」

純一は、うとうとしてきた。バスの振動とバスガイドの楽しい話のうちに眠り込んでしまった。そして気づくと花貫溪谷近くの駐車場に停車していた。ここに1時間あまり停車し、そのまま袋田の滝へ向かうことになっている。駐車場から舗装された山道を10分ほど登ると花貫溪谷の橋がある。

木の香りを含む清涼な冷たい空気を鼻孔に感じながら、胸の奥まで吸い込んだ。眠気や疲れも消えてなくなり山道をハイキング気分です歩いた。気分は晴れやかになり、心も軽やかになる。橋の上に覆うオレンジの紅葉は見事に賑わっている。行く手に風情ある赤い霧のようにもみじは華やぐ。橋の近くに、真っ赤に燃えるように、もみじが咲き乱れ、山の中の完璧なまでの造形美があった。燃える紅葉は人をも焦がす。

30mほどのつり橋をここに架けようと思った人はどのような人なのであろうか。つり橋ともみじが絶妙な位置関係を保ち、美の空間を形成している。つり橋の上にかかるもみじは、赤だけではなく、緑や黄色もある。繊細な自然の刺繍を見ているかのようである。妻と関係のないところで感動を覚えたのは久しぶりのことであった。

そのとき、長崎のフーコーの振り子が、16年ぶりに記憶の中で再び大きく動き始めるのを感じた。自転という目に見えないものを証明するフーコーの振り子のゆっくりとした大きな振れ幅がよみがえってきた。今の日常は、亡くなった妻との生活の延長上にあり、両親と住むようになったこと以外は何も変わっていない。仕事を変えたわけでもなく、職場も変えていない。

だが、この紅葉の強烈な印象は、妻との記憶の上に塗られる鮮やかな色彩になる。鮮やかな色彩が何層にも積み重なるならば、純一は助かる。心動かされる何かに出会えば、曇りガラスの世界から抜け出せる。何層にも塗り重ねて、旅に出て、出会って感動して胸を膨らませ上昇させれば、また違うところへ行ける。感動と言うマシュマロを何層にも積み重ねることにより、妻との記憶は底のほうへ沈む。心の隅に置いて。言葉が聞こえる。

純一は妻との記憶を消し去ろうとしているわけではなく、記憶に溺れないように、その記憶と適切な距離を保とうとしているだけなのである。

花貫溪谷からバスは出発して、袋田の滝へと向かっている。小悪魔的なバスガイドは、時折かわいらしい冗句をはさみながら、しゃべり通している。純一は、また、うとうととして、頭をたれて寝てしまった。

とんとんとん、と肩を叩かれた。

「着きましたよ。起きてください」

小悪魔的なバスガイドが、純一の顔を下から覗き込んで見ている。純一の目が覚めた。香水の

甘い香りがする。乗客は全員降りてしまったようだ。

「お疲れのようですね」

「すみません。寝てしまいました。袋田の滝ですか？」

「そうです。ここから歩いて10分のところにあります。ちょうど、今はこの駐車場にいます」と言って、純一に地図を見せて位置を指し示した。細い指先は、きれいに透明のマニキュアが塗られていた。

「この地図だと、袋田の滝はどこ？」

「ここですので、この目の前の道をまっすぐ行って、左に入るとすぐに分かりますよ」
小悪魔的なバスガイドが体を寄せてきた。距離が近いなと思って、純一ははっとした。

「ありがとうございます。分かりました」

「紅葉を見て、癒されてください！」

純一はバスを降りて、紅葉を見に来た大勢の人々に混じって袋田の滝へ歩いて向かった。主に家族連れや年配の方が多かった。道路脇には売店が並び、ちょうど昼食の時間であったので、あゆの串焼きと串だんごを買って食べた。とびきり美味しかった。

袋田の滝へ見るためにはトンネルを通り観覧場まで行く必要がある。トンネルに入ると左側に長い行列がある。第二観覧場へ行くための行列だ。第二観覧場へはエレベーターに登って、高いところから袋田の滝を見ることができる。右側は第一観覧場へ向かうのだが、行列はできていない。第一観覧場は袋田の滝を下から見上げる場所にある。

薄明かりのトンネルを歩いていくと第一観覧場へ着くと、迫力ある4段の滝が目の前に迫っていた。泡立つ岩盤の上を滑り落ちる幾本もの白い糸が、薄い皮のように岩盤を包み込み、やわらかく飛沫をとばしている。白い泡となって落ちてくる滝の落水は、4度の迫力ある豪快な岩盤に繊細な表情や動きを添え、見るものに力強さと涼やかなやさしさを同時に訴えかけていた。

次の瞬間、太陽の角度がほどよい角度となったのか、虹が突然現れ、巨大な滝の中腹あたりに、七色の虹がふわっと掛かった。観光客の興奮が一気に高まり、悲鳴にも似た歓声を上げる女性も中にはいた。

純一はその幻想的な風景に見とれた。純一のマシュマロがまた膨らみ、重ね塗りが、またひとつ塗り重ねられたのを感じた。七色の4度の滝。紅葉の山の中で見つける。純一は、感慨にふけり目を閉じた。すると、自分の過去の日記に書いていた高千穂溪谷や原尻の滝、龍泉洞の青く透明などこまでも続く地底湖、森深く神秘的な清涼感を漂わせていた奥入瀬溪谷、薄暮に沈む十和田湖の記憶がよみがえってきた。そしてテレビの泉までもが脳裏に浮かんできた。

目を開けると、観光ガイドが「春は新緑、秋は紅葉、冬は滝が凍りつきます」と説明している。純一は、ここは滝が凍るほど寒くなるのかと思いを巡らせた。久米さんが倒れた「寒の地獄」とどちらが寒いのかと、くだらない疑問が頭に浮かんだ。きっと「寒の地獄」だろう。あの寒さは尋常じゃなかった。

その場を立ち去って順路にしたがい進んだ。つり橋を渡り、帰り道の途中に、上方から鉄骨階段が下りている。このまま、帰るのも物足りない気もするので、様子を見に登ってみようと考え

えた。階段を登り始めると「袋田研究路」の看板があった。急な鉄骨階段から山道へと変わり、なおもきつい勾配は変わらなかった。周囲は紅葉の木々が賑わう。

ももの筋肉が少しばかり張り始めた。純一は、家族連れを追い越して登っていった。もう少しで頂上に着くだろうと思いながら登るが、一向に先が見えない登り道だ。同じように軽い気持ちで登り始めた人のひとりが、「あと、どれくらいですか？」と問いかける。「まだまだ、ありますよ。ここで1／3くらいかな。がんばってください」と言われると、それを聞いて「えー、まだまだあるの〜」といって帰ろうとする。それを聞いた軽い気持ちで登りかけた数人の人は、同じ様にやめたと言って帰ろうとする人と、せっかくここまで来たからもう少し登ってみようという人とに分かれた。

とにかく袋田研究路は不案内で、どこまで行くのかさっぱり分からないので、登って行ってやきもきする山道ではあるが、ただ、分からないだけあって手探りのわくわく感がかなりある。山道横には、オレンジと緑と黄色と赤が交錯した繊細なもみじの斑模様、木々の枝が森の黒い血管のように張り巡らされている。

山道の途中に、薄茶色に染まった木々の中に1本だけ真っ赤に染まった紅葉があった。自然のパレットに鮮血を落としたようであった。注意を惹き何かを訴えかけている。察してくれ、何かを読み取ってくれと言われてるように思えるが、皆目理解できない。しかしながら、強烈なインパクトをもって惹き付けられる。意味を読み取り、暗示するものを探ろうとするが、響く回答は得られなかった。そこにあるものは単純な美なのか。美には意味があるのか、ないのか。心を奪われることに間違いはなかった。

山道をさらに登っていくと、木々の合間から袋田の滝を見下ろすことができた。渦巻く水の傍ら、見事な紅葉が水流を引き立てている。山々の木々の合間から覗かれる、まだ本格的に落ちる前のなだらかな溪流の姿を垣間見ることができた。

第二展望台ははるか下のほうに見える。知らないうちに高いところへ来たことを知って純一は驚いた。空が近くなったような気がした。

少し登ると視界が開ける。シートを敷いて食事をしている人や、水などを飲んで休憩している人が十数人いた。眼前に広がる紅葉の一大パノラマを恍惚として眺めている。山々には、色とりどりの苔が繁茂しているかのように賑わっている。いや、チーズかもしれない。ブルーチーズ。枯木がやけに、力強く、勇ましく立ちそびえている。中には焼け焦げすぎた木々もある。清涼な風が吹く。赤やオレンジや緑や茶色の錦繡が延々とどこまでも広がる。何か心が軽くなる思いであった。霧島や阿蘇山や八幡平の山々の清涼感も訪れた。重奏する記憶が至福の感覚へと導いていた。

袋田の滝から竜神橋への移動は、周遊バスを利用した。昼過ぎになると、紅葉を見に来る観光客で周辺の道路は渋滞を起こしている。

「何時になったら着くのかな？」とバスの中で席に座れず立ちっぱなしの男性が、大きな声で男のバスガイドに向かって訊いた。

「この渋滞を抜ければ、進むと思うのですが、バス管理センターに連絡して確認してみます」と

男のバスガイドが携帯で連絡を取ろうとしていた。

「工事のため通行制限してるんじゃないの？」と別の男が叫んだ。

確かに赤く点滅する棒を振り回している交通整理員が先のほうにいるのが見える。

男のバスガイドが、バス管理センターと連絡がつき話している。

「竜神橋から出る接続バスも遅れてる？ 全線渋滞？ そうですか。このバスも袋田の滝を13時30分に出発しているんですが、予定ですと1時間で竜神橋へつく予定ですが、まだ半分くらいのところまでしか来ていません。大渋滞です」とここまで話すと乗客の1人が言った。

「竜神橋発JR常陸太田駅行きの最終バスが15時10分だから、遅れると竜神橋も見られなくなるし、帰れなくなってしまいますよ！」

それを聞いた乗客の何名か、同調するようにそうだよそうだよ、どうすんだよ、と口をそろえて騒ぎ始めた。それを聞いたバスガイドは乗客に向かって叫んだ。

「分かりました。接続のバスを遅らせてもらいます。そうじゃないと、竜神橋も見ることができないし、帰りのバスもなくなりますよね」と言うと乗客の中の若い女性数人が拍手をして喜んだ。再びバスガイドは管理センターと話し始めた。

「竜神橋発JR常陸太田駅行きの最終バスが15時10分となっていますが、1時間遅らせてください。そうしないと、こちらのバスのお客さんが帰れなくなってしまいます。えっ。だから、こちらのバスは予定より1時間も遅れてしまうので、竜神橋を予定通り出発した場合、お客さんが帰れなくなってしまいうんですよ。わかります？ 私はバスの運行管理者責任者ですから私に従ってください！」

そこまでいうと、乗客の中から拍手が沸き起こった。乗客の顔が笑顔になった。純一も、まさか男のバスガイドがバス会社全体の運行管理責任者だとは考えてもみなかった。また管理者はこうでなくっちゃいけないと感心もした。頼もしい限りであった。

竜神橋に着くと、観光バスや一般の乗用車が所狭しと駐車場に並べられてあった。秋の紅葉のお祭り気分一色であった。本州一の長さを誇る竜神大吊橋は、全長375mあり、ダム湖からの高さは100mある。橋を渡ると、上下に揺れている。あたりを見渡せば、遠く先まで紅葉の一大パノラマが展開されている。様々な色の山々のブロッコリが競うように花咲かせている。紅葉に見慣れたせいか感動は弱かった。以前、テレビで竜神橋の紅葉をニュースで紹介していたのを見て、ひどく感動したのを覚えていたが、今年はそのときよりも色が鮮やかでないような気がした。それよりも感動したのが、竜神橋の駐車場へ至る道路わきに咲いていた真っ赤なもみじであった。まるで作りものかのようにも思えるほど燃えるような真紅の葉は人目を惹いていた。美しい山の中の芸術作品に出会うと現実を忘れてしまう気さえする。

宮崎県の綾の大橋の高さを思い出す。歩く吊橋としては世界第2位で高さ142m。その高さによる足の震えの感覚が戻る。全長は250m。純一が行ったときは世界1位であったが、その後、さらに高い吊橋ができて第2位になったという。山陰線余部鉄橋も子供のころ祖父に連れられて行ったことがある。完成当初の明治45年においては東洋一の高さだったという。高さ41.45m、長さ310.59m。祖父を思い出す。記憶は重なる。

大学時代のサイクリング仲間はどうしているかな？ 西尾もジョンも大澤も大久保も吉波もみ

んな結婚して家庭を持っている。幸せに暮らしているんだろう。妻がなくなってから誰とも連絡を取っていない。思い出をありがとう。あのときの冒険が、今、純一に力を与えている。

常陸太田駅までの秋の紅葉巡回バスは、順調に進んでいった。辺りは暗くなり、陽も沈みかけている。純一は頭を垂れて眠った。駅に着くと、空はすっかり真っ暗になっていた。

駅のホームへ行くと、先ほどの渋滞騒動のバスに乗り合わせた人たちが待っており、若い女性三人組と壮年のおじさん三人組が楽しそうに話している。空を眺めても、星はほとんど見えない。八幡平キャンプ場の星空を思い出す。星屑を散りばめて走る流れ星。ライトだけを頼りに闇夜を自転車でする。心臓のポンプから37℃の血液が、かじかむ指先へ送り込まれる。

30分ほど待つと列車がホームへ入ると、純一は列車へ乗り込む。観光客にまぎれて、ジャージ姿の部活動帰りの学生がちらほら座っている。純一はまた眠った。

すぐに水戸駅に到着し、常磐線に乗り換えグリーン車に座った。駅で買った弁当とビールを持ち込んだ。列車が動き始めると、弁当を開け、ビールの栓を抜いた。列車は快調に闇夜を飛ばしていった。グリーン車には純一ひとりしかいない。外の風景は今朝方の夜明け前のもであった。これからきっと日が昇るのだろう。薄暗がりの中でフーコーの振り子が、重くゆったりと確実にまた動き始める。見えないものが見えてくる。

旅の途中では色々な人々に出会う。今日の可愛い小悪魔的なバスガイドは、観光大使になったらいい。渋滞騒動の渦中であって運行管理責任者であった男のバスガイドは男前な対応であった。そういえば、16年前の江戸っ子のリヤス式海岸で出会った魚屋のおやじは、よく考えてみるとバブル経済の被害者なのではないかと、ふと気づいた。

袋田の滝の紅葉は、純一の心にも色づいた。心地よい強烈な記憶は生きる力になる。感動することにより生まれ変わることができる。感動は人を再生へ導き、前に進む力を与える。旅に出て感動する。妻はいつもいる。妻は心の片隅におく。味わい深く重厚に深く深く色を重ねる。

純一は我孫子駅で降りると、そのままコンビニへ向かい、マシュマロを買って、すぐさま袋を開け、マシュマロを口に入れた。口の中でしゅわしゅわとマシュマロから気泡が沸き立った。純一はマシュマロを何個も何個も食べた。



紅葉狩りから3ヵ月後、優実のピアノ発表会が、市民ホールで開催された。優実が、胸をはって微笑みながら、ステージ左から中央へ向かって歩いてきた。

「優実よ。優実！ 出てきたわよ。出てきたわよ」と純一の母が叫び、妹に伝えた。優実の母親だ。会場いっぱい拍手が鳴った。純一は思いっきり拍手をした。

優実の父親も、待っていましたとばかりに、ビデオカメラを回し始めた。優実が中央まで来ると、会場へ向かって一礼した。なんと、素晴らしい、堂々としたお辞儀の仕方であろうと純一は感動した。

一礼をすると、ステージ中央にあるピアノの方へ行き、イスの高さと位置の調整をし始めた。優実は1年生。堂々としている。1年生には見えない。

すると、ピアノの先生もステージに出て、イスの調整を手伝った。がたがたと音を言わせて、高さを調整したあと、ピアノとの距離を見定めながら、イスの位置を調整するのだが、なかなか位置が決まらない。イスの足が床にこつこつとあたり、音が響いている。少し間合いがあり、会場全体に緊張感が走ったが、当の優実は何んとも思っていないようだ。イスの位置決めが終わり、いよいよ演奏だ。ゆっくりと優実がイスに座り、鍵盤に指を当て、そして、「よちよちペンギン」を弾き始めた。

すばらしい指圧で、しっかりと堂々と弾いている。途中、強弱をつけて、よちよち歩くペンギンを表現していた。演奏は「堂々ペンギン」になっていたかもしれない。いや、「よちよちペンギン」をうまく表現している。ともかく、途中一度もつかえることもなく、素晴らしくパーフェクトな演奏であった。演奏が終わると、顔の表情をぱっと明るくして笑顔で前へ出て一礼をした。礼儀たたく可愛らしい一礼であった。こうして、優実の演奏が終わった。家族みんなが笑顔であった。その後、優実が会場の席に戻ってくる。

「よくやったな。すごくよかったぞ」

優実の父親が声をかける。それに続いて、みんな優実をほめて拍手を送った。優実は照れたような笑みを浮かべていた。純一は優実に花束を渡した！

純一はこのような感動のそばにいたいと思った。これから過去の記憶の上に、新たな感動を重ねていくなれば、立ち直ることができる、そう強く思った。心躍る新たな状況を積み重ねることにより、また先へ進むことができる。そう思った。

姪がいる妹家族や両親と過ごすこの穏やかで感動的な流れと、思い出さず思い出そうとする妻への追憶と、二十歳の頃の真っ白なただただ楽しかったその時とが交錯するこの今を、七色に光る虹色の時のように純一は感じ、また、ここから始めようと考えていた。

map - 北茨城



北茨城

あとがき

この本の時期設定は、東日本大震災が発生した2011年3月11日の半年前ぐらいです。したがって、三陸海岸の場面や、北茨城の旅では、当然、震災以前の状況での話となっています。何もかも一瞬にして奪い去ってしまった大津波のことを考えると、とても心が痛みます。どんな言葉もむなしく感じてしまいます。私自身、何ができるというわけではなく、無力さを思うばかりです。ただ、大切な人を失ってしまった悲しみはわかります。希望をもって歩んでいただけることだけを切に願っております。震災から1年経って、なかなか復旧も進まない現実がありますが、一日も早い復興を祈っています。

2012年4月

虹色タイム

<http://p.booklog.jp/book/48152>

著者：池田真哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ikeshin55/profile>

池田真哉の本

「空の記憶」

<http://www.boon-gate.com/books/index/13990>

「猫山のトマソン」

<http://p.booklog.jp/book/40688>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48152>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48152>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.